

読むだけで理解できる教科書

# 世界史読本 2

ギリシアと  
ヘレニズム

2014年度版

## エーゲ文明

ハインリヒ少年の夢	1
トロヤ戦争	2
ヘラクレスの帰還	4

## ギリシア文明

神話の真相	4
暗黒時代	5

## ギリシアの民主政

ポリス時代	5
ギリシアの産業	5
民主政の確立とアテネの台頭	7
スパルタの民主政	9
ペルシア戦争の原因	10
ペルシア戦争の開始	12

## ギリシア文明の衰退

アテネの絶頂期	15
ペロポネソス戦争	16
ギリシアの混迷	17
ギリシアと奴隷制度	18

## ヘレニズム時代

マケドニアの台頭	20
アレクサンドロスの東方遠征	21
アレクサンドロス帝国とヘレニズム	23

## ギリシア・ヘレニズム文化

ギリシアの自然哲学	24
ギリシアの文芸	28
ギリシアの歴史文学	29
ギリシアの絵画・彫刻・建築	29
ヘレニズム文化	30
ヘレニズム時代の宗教・信仰	30
ヘレニズム時代の哲学	31
ヘレニズム時代の自然科学	31
ヘレニズム時代の彫刻・建築	32

## 参考文献

- 世界の歴史〈5〉ギリシアとローマ  
気候が文明を変える(岩波科学ライブラリー7)  
安田 喜憲  
気候文明史 田家 康  
気候変化と人間 鈴木秀夫

## ◇エーゲ文明

### ■ハインリヒ少年の夢

少年の夢は荒唐無稽なものが多い。ハインリヒ＝シュリーマンはドイツで貧しい牧師の子として生まれた。彼が7才のクリスマスに買ってもらった絵本『イーリアス』。作者は古代ギリシア人のホメーロス。彼はそこに描かれていた神話、特にトロヤ戦争の話に夢中になった。すっかりその話を真実だと信じた彼は、大きくなったら絶対ここに行くんだと言った。しかし周囲の大人は笑って彼に「これはおとぎ話で本当の話じゃないんだ」と論じた。しかし納得できなかった彼は、いつか自分がこの話が本当のことなんだと証明してやる、と心の中で誓ったのである。

それから30年後、ハインリヒは努力して語学の達人となり、商人として成功していた。彼がマスターした言語は、母語であるドイツ語の他、英語、フランス語、ロシア語など、全部で13にのぼったという。彼はこれらをほぼネイティブと同じくらいに使いこなせた。彼の成功は特に、ロシア語のおかげだった。当時ロシアは大国として認められてはいたが、文字や文法が西欧のものとは異なっていたため、商売の基本であるコミュニケーションが取りにくい国として知られていた。それに当時ドイツには、ロシア人は大使がたった一人いるだけだった。このためロシア語が堪能な彼は、競争相手が少ないために簡単に商売を成功させられたのである。

彼の語学習得の方法が著書『古代への情熱』の中に記されているので紹介しよう。彼は現地人と同様に会話するためには、

- (1) 大量に音読すること。(2) 決して翻訳しないこと。(3) 毎日かならず1時間あてること。(4) 興味あることについてその言語で作文を書くこと。(5) それを教師の指導によって直すこと。(6) 前日直されたものを暗記して、つぎの時間までに暗誦すること。

ということが必要だとしている。もう少し解説すると、(2)については、語学をマスターする上で理想はその言語を使って考えることができるようになることであり、「翻訳」という作業はしばしばその邪魔になることを表わしている。(4)については色々な英語マスター法の中で紹介されている。自分に関わる身近な内容について作文をすることは、昔から非常に効果がある方法として知られている。ある言語をマスターしたければ、その国の人と恋人になれというアドバイスもあるくらいだ。(5)(6)は先生や学校を徹底的に利用することを薦めている。シュリーマンは裕福でなかった時代から自費で語学の教師を雇っていた。

こうした努力の末に彼は億万長者となった。しかし40才を過ぎてからは徐々に商売の第一線から退き、投資や不動産で利益を得るようにした。すべては時間を作るためだった。これまで封印してきた考古学の学習に時間を費やしたのである。彼はその後、パリ大学で考古学を学んだ。さらに見聞を広めるために世界中を旅して回った。日本にもその途中で立ち寄っている。

彼が47才のときにギリシア人の若い妻(何と17才)と再婚した頃には、発掘への情熱は抑えきれないほどに燃え上がり、翌年から本格的な発掘に取りかかった。そして彼の話荒唐無稽と笑う人々を尻目に、自分でも驚くほどの成果を上げた。彼は当時のトロヤの推定場所を無視して近くの丘を発掘し、見事そこから都市遺跡を発掘した。これこそ歴史に名高い考古学上のドラマの一つ、トロヤ市の発見である。独学の素人学者は一躍世界的に有名になったのであった。

彼が次に向かったのは、トロヤ戦争のもう一つの舞台であるミケーネだった。そして慎重に調査をした上でギリシアに乗り込み、今度も見事



ハインリヒ＝シュリーマン



「アガメムノン王のマスク」

に遺跡を掘り当てた。もうこの頃には、彼は一躍有名人になっていた。次に彼が発掘しようとしたのは、神話の舞台クレタ島である。しかし、彼の名声と財力に目をつけた発掘地の所有者は、さまざまな名目で彼から金を巻き上げようとした。このため、彼は怒って発掘を中止してしまう。しかし彼が目をつけた場所からは、のちになってクノッソス宮殿の遺跡が**エヴァンズ**によって発見されている。シュリーマンの目は正しかったのだ。

以上がよく知られているシュリーマンの物語である。しかしいまでは、これらの全てが真実ではないことが分かっている。

まずシュリーマンには虚言癖があった。たとえば彼が商売に成功したのは事実だが、幼いときから考古学やトロヤに関心があったと言うことはなく、全ては自分より30才も若く教養も知性もある妻へのコンプレックスから、彼女の気を引くために作り上げた話らしい。つまり見栄を張りたかったわけだ。

そこから彼の「考古学への情熱」が始まったわけだが、当時はこの学問自体が宝探しとほとんど変わりがなく、その手法は乱暴で、とても科学的とは言えなかった。彼自身も遺跡がトロヤである証拠を見つけることにしか興味がなく、後世の研究に寄与するつもりなど全くなかった。遺跡の重要性に気づいたトルコ政府が発掘という名の遺跡の破壊を中止させようとしても無視し、発掘物の扱いについても政府との約束を破ることは稀ではなかった。これは彼の他の発掘でも共通して見られたことであり、シュリーマンの本当の姿を物語っている。

しかしたとえそうした汚点があったとしても、考古学におけるシュリーマンの功績は大きい。彼の発掘をきっかけに、神話を疑う動きは影を潜める。いまでは、神話とは何らかの過去の出来事を反映しているというふうに考えられているのである。

## ■トロヤ戦争…ギリシア神話とその真実

それではシュリーマンの時代から100年以上を経た現在わかっている古代ギリシアの歴史を物語ってみよう。

ギリシアの地に文明が生まれたのは紀元前2600年頃、まずアナトリア半島（小アジアともいう）のトロヤの付近に文明が発生した。これを**トロヤ文明**という。さらに同様な文明が紀元前2000年頃にエーゲ海の島クレタ島の地に**クレタ文明**、そして紀元前1500年頃にはミケーネの地にも同様な**ミケーネ文明**がおこった。いずれもエジプト文明の影響を受けたもので、戦争も少なく平和な社会だったようである。エジプトと同じような王政が行われ、青銅器が使われた時代であり、文字は**線状文字A**（未解読）や**線状文字B**が使用されていた。このAとかBというのは、両者を区別するための学術用語がそのまま定着したもので、A・Bそのものに意味はない。線状文字Bはイギリス人の**ヴェントリス**が1950年頃解読に成功し、古代ギリシア語の一種を表わしていることが解明されている。

クレタ文明を築いた人々は地中海の先住民で、ミケーネ文明を築いた人々はこの地に侵入したギリシア人の一種である**アカイア人**だった。トロヤ文明を築いていた民族はま



発掘品を身につけた妻



アカイア人:後で触れるが、アカイア人は、アテネの町を作った民族である。

だ分かっていない。

やがてミケーネのギリシア人は、紀元前1400年頃クレタ島に進攻してクレタ文明を滅ぼした。トロヤ文明も紀元前1200年頃に滅ぶが、ギリシア神話にあるようにミケーネに滅ぼされたのかどうかについてははっきりした証拠がない。しかし遺跡には大規模な火災の跡や戦闘の様子がはっきり残っており、なんらかの戦いが行われたことだけは間違いないのである。神話のようにミケーネが滅ぼしたのかも知れないが、真実はこれからの調査に期待しよう。さてその伝説のトロヤ戦争は以下のような話である。

トロヤの王子パリスは、その賢さにおいてギリシア中で名高く、神々にも知られていた。あるとき女神のヘラ（主神ゼウスの妻）、アテナ（知恵の女神）、アフロディテ（美の女神。ローマ神話ではヴィーナス）の3美神が、だれがもっとも美しいかをめぐって口争いとなり、他の神々の判断を仰ぐことになった。しかしいずれ劣らぬ美しさを持つ三人なので、これを決めることは神々にさえ難しかった。それに、女性の恨みはいつの世でも恐ろしいものだ。ましてや、美しくないとされた女神に恨まれてもすればどんな災いがあるかわからない。だれも答えてくれないため、仕方なしに三人の女神はパリスに判断を仰ぐことにした。

パリスも困りはしたが、彼は知恵をしばったあげく、三人の女神のそれぞれの美しさをありとあらゆる美を語る言葉を駆使してほめたたえ、最後には美しさを基準にせず美を司ることを理由にして、つまり美の担当者であることでアフロディテに軍配を上げたのである。美しさは同等、そして担当が違うとなれば、ヘラとアテナには文句を言うことはできないはずである。パリスはこれで何とか難を逃れたと思ったが、しょせんそれは男の理屈。自分が最も美しくはないとされた女心まではわからなかったのである。ヘラとアテナは密かにパリスを恨み、彼に復讐を仕掛けたのである。

あるときパリスは父の代理でスパルタ王の結婚式に出かけた。ところが新婦ヘレネーと出会ったことで、彼の運命が狂ってしまう。二人の女神から依頼された復讐の女神の呪いで、出会った瞬間二人は、燃え上がが燃え上がる恋心:現代なら二人の思慮の無さに責任がある恋心にとらわれてしまったのである。次の朝二人の姿は町から消えていた。新婦を奪われたスパルタ王はと考えるが、当時、人の気持ち(恋)というものは神の思召しであり、当人らに責任はないと考えられていた。例えば入試によく出る英単語のenthusiasm「熱意」という単語などは、en(in)「中に」とtheos「神」が合わさったもので、「神の意の中に」の意味が語源である。

ギリシア側は勇者アキレウスを先頭にトロヤの町を攻めたてたが、町は難攻不落の城壁を持ち、勇者ヘクトルを中心にこれに耐えた。戦いは10年続き、その間ヘクトルはアキレウスとの一騎打ちで殺されるが、アキレウスも唯一の弱点である（アキレス腱の由来）足のカットに毒矢を撃たれて殺されてしまう。最後に知恵者オデュッセウスの謀で「木馬の計」でトロヤの町は落城するのである。

ギリシア軍がある日突然撤退するが、その後一台の巨大な木馬が残されていた。トロヤ側が不審に思って逃げ遅れていたギリシア兵を捕らえて聞き出した。すると男は、前日ギリシア側に神託が下り、戦いを続ければ神々の罰が下るため、それを避けるために木馬を作ってそれを神々に捧げたことが告げられた、と自白した。トロヤの町は喜び、この木馬を勝利の印として神殿に供えることにした。しかしただ一人ラオコーンという知恵者だけが反対したが、彼は息子たちとともに突如現れた大蛇に絞め殺されてしまう。女神によって口を封じられたわけである。しかし彼の死は神の罰とされ、木馬は運び込まれた。

その夜、木馬の中に隠れていたギリシア兵がトロヤの城門を開けた。すると闇にまぎれて密かに戻ってきていたギリシア軍が町に乱入した。トロヤの町は炎上して滅んでしまったという。

ちなみに、コンピュータウィルスには「トロイの木馬」という種類がある。これは普通のファイルにくっついてコンピュータの中に侵入し、入ったとたん内部を荒らし回るのだが、そ



壺絵に描かれたトロイの木馬



ラオコーン群像

の性質との神話との類似からその名が付いたものである。

## ■「ヘラクレスの帰還」

次もギリシア神話の話である。神話の中で最大の英雄ヘラクレスは、全能の神ゼウスの子であったが、いつものようにゼウスの浮気でできた子だったため、ゼウスの妻ヘラの呪いを受けてしまう。本来彼はペロポネソス半島全体の王となるはずだったが、呪いによって運命を変えられてしまったのである。ヘラクレスが本来の自分の運命を取り戻すためには試練を乗り越えねばならなかった。試練は12もあり、いずれも困難なものだった。その中からいくつか紹介しよう。まずはネメアの獅子退治。ネメアの谷に住む獅子は、分厚い皮膚を持ち、さらにその下には甲羅があるという怪物で、人や家畜が多数襲われて人々は困っていたが、ヘラクレスはこれを3日間絞め続けて殺すことに成功した。ヘラクレスはその後このライオンの皮を鎧代わりにまとうことになる。またライオンの魂は、その後神によって天に上げられ、獅子座になったという。

世界の果てにあるヘスペリデスの園にある黄金の林檎をとってくる試練のときは、さすがのヘラクレスもどうやって手に入れたらよいのか全くわからなかった。そこで、人間に火の使い方を教えたために、ゼウスに罰としてカフカス山に鎖で縛り付けられていた知恵者プロメテウスを救い出して教えてもらった。

プロメテウスは長い間同じ格好をしていたため、しびれた手足をさすりながら、「ヘスペリデスの園に住んでいるニンフ（妖精）たちは巨人アトラスの娘だから、アトラスから話してもらえば何とかできるだろう」と答えた。巨人族は、はるか昔にゼウスらとの戦いに敗れ、罰として天空を担ぐ仕事を命ぜられ続けたのである。

ヘラクレスがアトラスのところに行き相談すると、アトラスは自分に代わってヘラクレスが天空をしばらく担いでくれれば、その間に娘たちから林檎を持ち帰ってやろうと言った。仕方なくヘラクレスはこの条件を聞き入れた。怪力の持ち主ではあるが、正直者であり頭が良くないアトラスは、約束どおり林檎をヘラクレスのところへ持ち帰ってきた。しかし再び天空を担ぐ重さを思い出すと急にいやになって、林檎は自分が持って行ってやると言い出し始めた。ヘラクレスはすぐにアトラスが逃げるつもりなのに気づいて、「よしよかった。私がきみの代わりに担ごう。だけどさすがに天は重いので、楽な担ぎ方を教えて欲しい」と頼んだ。そしてアトラスが見本を見ている間に、ヘラクレスは丁寧に礼を言って林檎を取って立ち去ったのである。

こうして自分自身の力と多くの人の助けによったりしてヘラクレスは12の試練をすべてなし遂げた。彼の偉業はすぐにギリシア中に伝わった。これで焦ったのが、本来彼が就くはずの王位に就いている人物である。彼は地位を奪われるのを怖れたが、その後ヘラクレスは殺されて王位に就くことはなかった。それでも心配になった王はヘラクレスの息子たちを殺そうとするが、逆に反撃されて王位を奪われてしまったのである。結局予言は、少し変えられて実現されたのである。ギリシアでは後述するスパルタなどペロポネソス半島の都市国家が先祖を英雄ヘラクレスとしている。彼らの主張には歴史的な根拠がある。ドーリア人の侵入という事件である。

## ◇ギリシア文明

### ■神話の真相

ギリシア人やローマ人が属する「インド＝ヨーロッパ語族」という民族集団は、かつてはカスピ海の北からアナトリア半島（いまのトルコ）にかけての草原地帯にいたらしい。

それが紀元前8000年～6000年頃に移動を開始し、東に行った人々は中央アジアからインドへ、そ



して西に行った人々はヨーロッパに向かった。

彼らは紀元前2000年代以降に農耕地帯に侵入し、ギリシアの近くでは、まず紀元前2000年頃にその一部ヒッタイト人がアナトリア半島に侵入しヒッタイト王国を作った。続いて紀元前1500年頃にギリシア人の一派**アカイア人**がミケーネ市を中心に**ミケーネ文明**を築いた。アカイア人を含む「海の民」とよばれる集団も、この頃地中海東岸地域に侵入し、いくつかの王朝を衰退や滅亡に追い込んでいる。ヒッタイト帝国の滅亡はアカイア人のせいだというのが有力な説である。

同じ頃東方ではインドにアーリア人が侵入し、インダス文明の要素を吸収して現在のインド文明の基を築いていく。またメソポタミアには、イラン人が侵入していった。そして最後に、少し遅れて紀元前1100年ごろにバルカン半島を南下していったのが**ドーリア人**である。

彼らは先住の諸民族や同族のアカイア人などの国を滅ぼしながら南下し、最終的にはシチリア島や南イタリアにまで進出した。こうしたドーリア人のギリシア侵入と支配を正当化しようとしたのが、各地に残る「ヘラクレスの子孫の帰還」伝説なのだと考えられているのである。

## ■暗黒時代

ドーリア人の侵入はエーゲ文明を完全に滅ぼすことになった。線状文字は忘れられて使われなくなり、人々のはもとの集落を放棄した。そしていくつかの集団（部族）が集まって新しい形の集落を作ったのである。その集落は、外敵を撃退しやすいように、小高い丘の周囲に作られた。こうした集落は、まわりに城壁を巡らし、中央の丘**アクロポリス**に部族神や守護神をまつる神殿を建てるようになった。普段の生活は城壁の中で行ない、農作業は城壁の外で展開する。外敵に攻められやすい夜には堅く城門を閉ざし、理由もなしに夜間に外出したり、城門を開けようとした者は死罪とされた。こうした「**集住**（ギリシア語でシノイクスモス）」とよばれる形で作られた集落を**ポリス**（都市国家と訳される）という。ちなみに日本でもこの頃、弥生時代の末期に「高地性集落」とよばれる似たような構造の集落が作られている。

この時代は文字による記録が一切残っていないことから、暗黒時代とよばれる。暗黒時代はドーリア人がエーゲ文明を滅ぼしてから、その後に新たなギリシア文明が形成される前7世紀までの時代を指す。この間にギリシアにはペロポネソス半島にドーリア系の**スパルタ**市、アカイア地方にイオニア系の**アテネ**市、そしてアナトリア半島の地中海岸にミレトス市などのポリスが多数作られている。

## ◇ギリシアの民主政

### ■ポリス時代

これらポリスはすべて高い城壁、中央の神殿丘、周囲に農地という共通点を持っていた。そしてポリス内

の人は同じ言葉話すということで、互いに仲間意識を感じていた（この仲間＝ギリシア人を**ヘレネス**とよぶ）。そして異なった言葉話す人々を**バルバロイ**（聞き苦しい言葉話す人々の意味）とよんで区別した。

ポリスは一般的に小さなものが多く、人口はせいぜい数万人といった規模だった。町の面積も決して大きくはなく、全住民がたがいに顔見知りであることが普通だった。

このようにポリスは軍事的な観点から作られたものだった。そのため、町は構造的な弱点を抱えていた。城壁に囲まれていることや、必ずしも水源や排水に恵まれていないため、何らかの原因で人口が増え、すぐに町の衛生状態が悪化したのである。これを解決する方法は、ポリスの住民のある一定規模が他所に移住することだった。そうした新たに作られた都市を植民市という。前にオリエントの所で触れたフェニキア人も植民都市を築いたが、それは純粋に経済的なものだった。しかしギリシア人の植民都市は、初期には社会問題の解決法として作られたのである。ただしこの後で触れるように、後にはフェニキア型の経済的なものも増えてくる。

### ■ギリシアの産業

では次に、ギリシア人の産業を見ていこう。ギリシアという地域は、有史以前にアルプス山脈からヒマラ

ヘレネス:ギリシアの正式名称は当時から現在に至るまでこれ。ギリシアとはローマ人がよんだ名称グラエキGraeciが広まったもの。

バルバロイ:英語のバーバリアン(野蛮人)という単語や、北アフリカに住むベルベル人の名はこれに由来する。



ヤ山脈まで連なる山塊の一部が、地殻変動で沈下してできたところである。そのため海岸線は元の山の稜線の形を反映した複雑なものとなっており、平地が少なく、海は多くの島々が浮かぶ多島海であった。したがってオリエントのような奴隷を使った大規模農業には不向きだったので、似



た条件をかかえていたフェニキア人にならって植民市を各地に築き、海上交易に乗り出したのである。ただし彼らが植民市を築いたのは、フェニキア人がまだ手をつけていない、地中海北岸や、黒海の周辺であった。

やがてギリシアの地形と気候を利用した**オリーブ**とブドウ栽培（つまりオリーブ油とワイン製造）が始まると、交易がいっそう活発化した。

もともとオリエントでは、油は高価な牛か豚の脂が使われ、酒も麦を発酵させたビールが一般的だった。しかしギリシア産の安価で高品質なオリーブ油とワインが知られるようになると、一般庶民から上流階級まで一大ブームとなったのである。オリーブ油とワインは、オリエント世界の家庭には無くてはならないものとなっていった。そしてこのことがギリシア人の生活に変化をもたらしていったのである。

ギリシアの地形が穀物栽培に適していないことについてはすでに述べたが、オリーブの木やブドウ栽培となると話は変わる。これらの作物は斜面の多い土地でも作りやすく、またギリシアのように雨の少ない気候でも栽培できる。またどちらも雑草を嫌うので周囲の木を切る必要があるが、伐採した木材は油やワインを入れるための陶器製の壺を焼くのに使うことができた。つまりオリーブとブドウの栽培は、穀物栽培に不適なギリシアという土地に最適の農業だったのである。

オリーブ油やワイン、さらにオリエント各地から購入した産物を満載したギリシア人の船が地中海東岸の港に出入りするのが珍しくなくなった。ギリシア人は船乗りとして、そして商人としての適性を見せつけるようになり、生活は豊かになっていった。

ギリシア人にとってもうひとつの収入源が「傭兵」である。ギリシアでは市民は自前で武器を用意し、それで自分の町を守る義務があったのだが、そうした武器は傭兵として出稼ぎに行く際にも役立ったのである。

ギリシア人傭兵が得意なのが、青銅製の盾と長槍を抱えた兵隊が横一列にぎっしりと並び、槍を正面に掲げたままあいてに向かって突進する密集戦法だった。こうした重装備の歩兵を**重装歩兵**、そしてこの重装歩兵が横1列に並んだ1部隊が通常8列ほどの重なりで相手に突進する戦法を**ファランクス(Phalanx)**という。

この重装歩兵部隊はギリシア独特の軍隊であり、攻撃に対しても防御に対しても絶大な威力があった。独特といったのは、戦法をマスターするためには部隊全体がちょうど二人三脚のように歩調をあわせる必要があり、小さい頃から訓練が必要なのである。ポリスの小さくまとまった環境が、重装歩兵を生む母体であった。

一方オリエントでは一般的に、司令官や部隊長は、貴族で馬に乗る騎兵であった。騎兵は時には集団で騎馬部隊となることもあった。さらにはこれに戦車（騎馬戦車chariot）が付随することもあった。ペルシア軍の主力は、農民で形成される弓歩兵だった。これに対するギリシア人の重装歩兵戦法は、騎兵が近づけば長槍で、弓歩兵に対しては盾と鎧で対抗した。さらに騎兵や歩兵の突撃に対しても、手と手をがっしり結び合った重装歩兵集団が、まるで針で覆われた動く岩のように相手を粉碎したのである。古代世界でこれに対抗で



ギリシア陶器



きたのは、アフリカの戦象部隊くらいしかなかった。

当時の軍隊はどの国でも地方領主が中心の小部隊の寄せ集めという形だった。各国の王は、自前の重装歩兵をゼロから養成するより安くついたので、競ってギリシア人傭兵を雇っていた。後で触れるペルシア戦争の時も、ペルシア側に雇われた多数のギリシア人傭兵団が同朋と戦っている。アレクサンドロス大王のペルシア遠征の時も、やはりギリシア人傭兵団がペルシア側で戦った。

一般的に傭兵と言えば、金だけで動く不誠実な兵士というニュアンスが含まれている。たしかにそのような兵士もいただろうが、少なくとも記録に残っているギリシア人傭兵はそうではなかった。たとえばアレクサンドロス大王と戦った傭兵軍団は、同じギリシア人との戦いにもかかわらず、頼りないペルシア皇帝を最後まで守って戦った。彼らの忠誠心は、プロの兵士としてのプライドから来ており、傭兵としての信用を高めることにつながっていた。仕事というものは収入を得る手段ではあるが、同時に生きがいややりがいを感じる機会でもあり、その人の人格の一部でもある。そうしたものは、時代によって変わるものではない。

## ■民主政の確立とアテネの台頭

ポリスの多くは「暗黒時代」には王政であったり、貴族の合意で決定が行われる貴族寡頭政だった。しかし紀元前7世紀頃にはその多くが民主政に移行していったようだ。この間の経過については、ほとんどのポリスの記録は残っていない。例外なのが**アテネ市**と**スパルタ市**である。まずはアテネを取り上げよう。

アテネはイオニア人が作り上げたポリスである。古代にはアテナイとよばれた。ギリシア神話の知恵の女神アテナからとられた名前である。アテネ市もギリシアの例に漏れず穀物農業に適した土地には恵まれず、商業に活路を見出す市民が多かった。アテネはバルカン半島から飛びだした形の半島の先端近くにあり、その立地条件を活かして黒海と地中海を結ぶ交易の中心に位置するようになった。

アテネも初期には王政、続いて貴族政となったが、やがて民主政に移行した。そのきっかけとなったのが紀元前621年の**ドラコンの成文法**だった。これは貴族ドラコンが、それまで貴族の寡頭政であったアテネ市の社会問題を改革しようとして制定した法であるが、だれもが目に見える形で残したことが画期的だった。

ドラコンの法は、いまでは部分的にしか残っていない。だがどうやらこの法はアテネ市の問題を解決することはできなかったようだ。そこで次に行われたのが前594年の**ソロンの改革**だった。

ソロンは紀元前7世紀後半から前6世紀前半の人物で、古代ギリシアでは七賢人の第一として有名であった。有名な哲学者のプラトンはソロンの兄弟の遠い子孫に当たる。

七賢人とは、あるとき漁師が海で魚をとっていたところ、海底から黄金の壺が上がってきて、それが原因で大きな争いが起こってしまった。当時こうしたことが起こったときは、有名なデルフィ市の神託を聞くのが通例だった。

デルフィ市にはアポロン神の神殿があり、その中心には巫女（みこ）がアポロン神のお告げを受ける場所があった。いまは荒れ果てているが、かつては周りは緑豊かで大きな岩の間からガスが吹き出す場所があり、巫女はそれを吸ううちに神懸かり状態になってお告げを語るのだった。このお告げは非常に当たると評判であり、ギリシアどころかペルシアの皇帝までお告げを求めてきたほど有名だったのである。

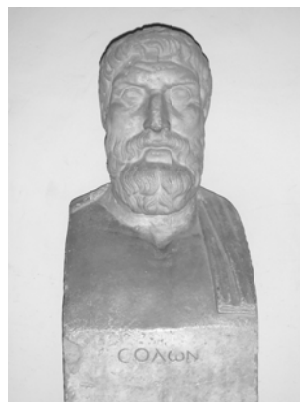
結局デルフィの神託では、壺は「最も賢き者に与えよ」ということになったので、当時賢者として有名な**ミレトス市のターレス**に渡されることになった。ところがターレスは、私はそんな者ではないと言って、別の人物を推薦した。そこで壺はその人物に渡されることになったのだが、その人物もまた別の人物を紹介した。こうして壺は次々と渡っていき、結局はターレスの所に戻ってきた。ターレスは困ってそれを神殿に奉納したが、この時



重装歩兵隊(ファランクス)

密集戦法:もともと密集戦法の元祖はメソポタミアのシュメル人時代にあったが、本文にあるように、その後オリエントでは弓歩兵と騎兵が中心となった。これに対し、密集戦法を高度化したのがギリシア人である。

成文法:成文法に対し、支配者層の合意のみで行われる法を不文法という。不文法は決定の基準が合意のみであることから、時代や構成メンバーが変われば基準が変わってしまう。さらに決定成立の経過がメンバー以外には分からないという、不安定で不平等なものになりがちである。



ソロンの胸像(バチカン博物館)

壺が渡った七人のことを「七賢人」とよぶようになったのである。ソロンはその一人だった。

話を元に戻そう。ソロンの時代のアテネでは、貴族の支配体制が揺らいでいた。貴族は古くからの部族制社会の頂点におり、農民から収穫物を一定の割合で税として取り上げる形で支配していた。ところが交易で豊かになる平民が増加するにつれ、財力や人のつながりが重要な社会にと従来の農業や部族制を基本とする社会のしくみはうまく機能しなくなっていた。実際、貴族よりはるかに財力で勝る平民が増えており、市政も彼らからの税収なしには立ちいかなくなっていた。しかし彼らの身分は平民であり、市政に参加することは許されていなかった。

奴隷：奴隷の問題についてはあとで詳しく触れる。

また、交易で富を蓄えるのには才能と運が必要であり、成功する人もいれば失敗する人もいる。失敗した人は破産すると、自らの身売って奴隷となって借金を返すしかなかった。当時は奴隷は戦争の捕虜などが買われてくる事が一般的で、債務が原因となる人はほとんどいなかった。ところが当時のアテネでは、こうした人が続出し、解決法をめぐって貴族と平民の間で激しい対立がおこっていた。要するに貴族以上に豊かで力のある平民が出てきた一方で、債務が原因で悲惨な奴隷身分となる人が生まれ、良い解決法が見つからなかったのである。

ソロンはこうしたアテネ市の改革を任された。賢者として有名だったのが第一の理由だが、彼自身が中産階級の出身であって、対立していたどの集団にも属していなかった事も原因らしい。

ソロンの改革の内容は、まず市民の負債をすべて破棄し、借金が原因で奴隷身分に転落していた人を解放し、自由市民の身分に戻した。そして以後は借金を返すために自らを奴隷として売ることを禁止した。さらに貴族や平民などの生まれつきの身分に代わって、財産や収入によって市民を4等級に分け、上の階級ほど政治に関与できる場を広くできるようにした。貴族は比較的豊かなので、上位に入る。一方で最も貧しい階級でも民会（いまの国会にあたる）に出席できるようにし、裁判に参加することもできるようにした。他にもさまざまな貴族に有利な法律を改め、新法を制定し、以後のアテネの法律の根幹を作り上げた。

他にも改革では、オリーブ以外の農作物の輸出を禁止した。これは、慢性的な食糧不足にもかかわらず、価格が高騰したときには平気で国外に穀物を輸出する業者がいて、庶民を困らせていたからで、市民の食の安全に気を配った改革だった。

ソロンは、部族制や身分制がもはや機能しなくなっている現実を認め、代わって財産という新しい尺度を導入した。出身部族や身分にかかわらず財産が多ければ有利になる体制を作り上げ、社会的に上昇したければ財産を増やせばよいという、一種の能力主義を打ち出したのである。その一方では、もっとも低い階級でも市民としての最低限の権利が守られるようにした。つまり最低限の生活を保障しながら能力主義を導入するという、現代でいう新自由主義的な改革を行ったのである。

これだけ慎重に練り上げられた改革であるから、結果は当然成功した、と言いたいのが現実はそのようではなかった。まず改革の最大の犠牲者となる貴族が権限の喪失に猛反発し、最も恩恵を受けるはずの貧しい層さえ、自分たちが望んでいた土地の再分配という形の最低限の収入保障が改革の項目になかったため失望し、反発した。つまり改革の影響を受ける人が皆不満を持ってしまったのである。どんなに客観的に素晴らしい改革でも、利害関係者が納得しなくては成功しない。ソロン自身は地位を利用する人ではなく、純粋に社会改革を実現しようとしたただけだったが、改革は失敗に終わったのである。彼は失敗の責任を取って政界からの引退に追い込まれ、非難の嵐に耐えきれずに海外への移住（事実上の亡命）に出た。

ソロンの失敗の後、彼の役割を受け継いだのが友人のペイシストラトスだった。彼はソロンのような話合いによる解決に限界を感じ、力による解決を試みた。彼はわざと自分で自分の体に傷を付けてそれを政敵によるものと訴えて同情を買い、警備兵を合法的に周囲に置くことを認めさせた。そして次第にその武力で反対派を従わせていき、ついには貴族中心の政権を打倒し、**僭主**（タイラント）に就任して軍事独裁政権を樹立した。こうした政治を**僭主政**（タイラニー）という。

彼は政権に就くと、まず北方から多くの鉱山技術者を連れてきて、当時存在が知られていながら技術的な問題で採掘が行われていなかった銀鉱山の開発に成功し、アテネ市に多額の収入をもたらして市民の支持を得た。また先見性のあったペイシストラトスは、アテネの産業の発展を支援した。従来は西方のコリントが

ギリシア最大の産業都市で、陶器の最大の産地でもあった。彼の時代になるとアテネ産の陶器がコリント産を圧倒し、アテネはギリシア第一の産業都市に登りつめるのである。またペイシストラトスの時代からアテネでは、祭りがにぎやかに行われるようになり、さまざまな新しい文化が生まれた。例えば演劇は、彼の時代に初めて行われるようになったものであり、本来は合唱の歌手が曲間に行っていたパフォーマンスが独立したものだった。演劇はその後半世紀の間に芸術として洗練され、次の世紀になると**アイスキュロス・ソフォクレス・エウリピデスの三大悲劇詩人**を生むことになる。

開発独裁：1970年代から80年代の東アジア諸国の経済発展で注目された体制。日本の明治維新直後の政治方針はこれに近い。

こうして彼は軍事力と経済、そして文化の発展を背景に、貴族を抑圧して平民主体の政治を確立した。現代でも発展途上国で、軍事独裁政権が経済発展を図りながら独裁政を行う「開発独裁」という形態の政治体制をとることがあるが、これと似た形の政体である。

独裁政には眉をひそめる人々も、彼の政治姿勢とその結果には文句の付けようがなかったため、アテネの政治は平民中心に移行した。しかし独裁体制はその方向が独裁者の個性に左右されてしまう。ペイシストラトスの政治姿勢は生涯のあいだ、穏和・寛容・中道といった方針が維持されたため、人によっては黄金時代と称賛されたが、後継者がその姿勢を継ぐことは難しかった。実際彼の死後に息子が後を継いだ但、結局は暴政となってしまう、独裁体制は倒されてしまう。この時期アテネ以外でも僭主が出現することが多かったが、その多くが政治姿勢に問題があった。このため僭主とは暴君であるというイメージができあがった。

暴君：骨格のイメージから連想されたものがTyrantタイラントの姿だったため、名付けられたのがTyrannosaurusティラノサウルス(暴竜)である。

ペイシストラトスの残党の政権が前510年に倒れた後、彼らに排除されていた一派が政権を奪回した。その中から登場するのが**クレイステネス**である。彼は新たな改革を行おうとしたが、ペイシストラトス時代の政策のほとんどが好評かつ有効だったため、変えることはできなかった。

彼の改革の一つは、二度と僭主政が生まれないようにするための**陶片追放(オストラシズム)**制度である。これは、投票によって僭主になりそうな可能性のある人物を10年間国外に追放する制度で、財産の没収など市民権を侵害するようなことはせず、10年という、政治家として忘れ去られるのに十分な間だけ国外にいてもらうという制度であった。そのため実際には、あまりに政争が激しい場合に、市民が投票によって強制的に政争を終わらせる制度として運用されたのである。



ΘΕΜΙΖΘΟΚΛΕΣΤΙΣテミストクレスと書かれた陶片。テミストクレスはペルシア戦争で活躍する政治家。

このとき投票に使われたのは、いまのように紙ではなかった。当時は紙はまだ存在せず、それに代わる羊皮紙も非常に高価であった。このため使われたのが、アテネの産業陶器業から生まれたゴミである、陶器のかげら(陶片)だった。投票者は陶片の表面に、尖った金属片などで名前を書いたため、制度にこの名が付いたのである。

しかしクレイステネス改革の要点は、そこではなかった。彼は、ほとんど実態がないのに残されていた部族制に基づく政治上の諸区分を廃止し、市を人口数など行政的に平等な10の単位に分けた(十部族制)。この結果、貴族の権力基盤は分断されてその存立基盤を失った。もっとも貴族は、この頃は富裕な市民と変わらなくなっており、あまり問題はなかったのである。ほかにも軍事指導者である将軍職が設けられたが、これは後に行政権も認められ、実質的にアテネの最高職となった。

こうした改革によってアテネ市の民主政は確立したが、まだそれは富裕な市民中心のものであり、「民主」と言いきれないほどではない。実際、陶片追放は制度ができてでも実施されるまで20年もかかった。アテネ市民も、いくら僭主を再出現させないためとはいえ、市民の権利を侵害する危険性のある制度の実施には慎重だった。適用されたのもせいぜい10人余りでしかない。これが実施されるとき、それはアテネ市民が自分たちの体制に自信を持ったときであった。その機会は改革の仕上げをするかのように、海の向こうからやって来た。ペルシア戦争である。

## ■スパルタの民主政

このあたりで目を西方のもう一つの「民主政」国家に転じてみよう。**スパルタ市**である。スパルタの民主政を「」付きとしたのには理由がある。

スパルタ：アテネ人がよんだ名前。スパルタ人自身はみずからの町をラケダイモンとよんでいた。

前に書いたように、スパルタはドーリア人が先住民のアカイア人を征服して成立したポリスである。スパ

ルタは王政で、二つの王家が代々国王を共同で務めていたが、国王の役割はよくわからないし、あまり権限は強くなかったようである。貴族もいたようだが、たいした特権を持ってはおらず、市民間はかなり平等だった。スパルタは民主政ではあるが、その形態は以下に述べるように非常に独特であった。それはこのポリスの成立事情から生まれていた。

スパルタ人は先住民を征服して奴隷化し、市民に平等に分配した。この奴隷化した人々をヘロットという。スパルタには他にも従属的市民（周辺民ともいう）ペリオイコイとよばれる準市民がいた。彼らはおもに手工業や商業に従事し、小規模ながら農地も持っていたが政治的な権利は持っていなかった。ペリオイコイがどのような起源を持つのかはよくわかっていない。何にせよスパルタは、人口わずか5万人の自由市民で、ペリオイコイ2万人、そして15万から25万人におよぶヘロットを支配せねばならなかった。そのための体制を作り上げたのがリュクルゴスだった。ただしこの人物が実在したかどうかは、よくわからない。

しかしこのリュクルゴスの改革により、スパルタは「軍国主義」とよばれる体制になった。スパルタ人は男性も女性も、支配体制を維持するための人生を送ることになる。狩りと宗教行事以外の食事は、共同食事で取らなければならなかった。家族毎の食事など存在しなかった。他にもぜいたくが禁止され、そのために金銀貨幣の使用禁止が徹底された。おかげでスパルタは商業にはほとんど無縁であった。先述したペリオイコイの商工業も、必要最低限の需要のためらしい。そしてリュクルゴスが定めたスパルタの制度の最も特徴的なものが「スパルタ教育」であった。

まずスパルタ人は生まれるとすぐに選別の儀式をうけねばならなかった。生後すぐの赤子がワインに体をひたされ、そのときにひきつけを起こすと、すぐにオオカミがうろつく山中に捨てられるのである。次に6才になると男の子は強制的に家から離され、共同生活を送るようになる。この時彼らが着るものは、夏も冬もたった一枚のマントだけである。ギリシアはヨーロッパ南部にあるが、それでも冬は寒く雪も降る。それでもマント一枚だけなのである。当然、体の弱いものは耐えられずに死んでしまう。食べ物も不足気味にしかもらえなかった。どうしても食べたいなら食物を盗んで得るのが当然と考えられていた。これらは戦場の現実にも即したものである。ただし盗みの現場を見られることは恥だと考えられていた。

スパルタでは千年後になっても、少年たちが大人たちによってむち打ちの苦行に耐える儀式があったという記録がある。このような、強きを称え、弱きを嫌い、弱肉強食を当然と考えていたのがスパルタだった。

スパルタ市民の共同生活体は、戦時にはそのまま部隊となった。男性がこの共同生活から離れて家庭を持てるのは30才を過ぎてからだった。しかし家庭を持ってもそれで現役引退というわけではない。次は子供を作ることが要求されるのである。もし子供ができなかったらどうなるか。

あるとき一人の老人が人々の集まっている所にやってきたが、だれも彼に席を譲ろうとしなかった。スパルタでは老人は一般的に尊敬されている。彼はある若い男に席を譲ってくれといったが、彼は「あなたが、私に席を譲ってくれるような子供がいればね」と言い放ったという。その老人が子供を持っていないことは周知のことだった。もし子供ができそうにもないということがわかったなら、この話のようにならないために、夫は妻に子供を何としてでも作らせねばならなかった。これが何を意味するかは分かるだろうか。スパルタ人には子孫を残す義務があり、それは愛というものを越えていたのである。

またスパルタでは女性も男性と同じく肉体を鍛えること、軍事訓練を受けることが求められた。戦争中男性が出払っていて女性しかいないときにヘロットやペリオイコイの反乱があっても町を守るためである。

当時ギリシアでは一般的に女性は男性より一段劣るものと考えられており、女性が日中一人で出歩くことさえ非常に恥ずかしいこととされ、そういう女性は売春婦の類としか見られなかった。

ところがスパルタでは女性も男性と同じように、人前で踊ったり歌ったりしたし、男性と同じように競技会に出場して、競技で失敗した人をからかったりしたのである。男女がほぼ同権だったのはギリシアではスパルタだけだった。すべてが軍事のためとはいえ、貴族と市民がほぼ平等、男女もほぼ同権。しかしながらその実態を見れば、現代の感覚では民主主義と言うことにはためらいがある。それでもそれはそれで一種の民主主義、さらには男女共同参画社会、それがスパルタ市なのだった。

## ■ペルシア戦争の原因

前にエーゲ文明がオリエント文明の影響を強く受けていたと述べたが、それはギリシア文明の時代になっても変わらなかった。これも前に述べたように、ギリシア人商人はフェニキア商人と競って地中海交易に参入し、競争をくり広げた。さらにギリシア人傭兵が、オリエント各地に出向いていた。

アテネ市で貴族と平民の対立が始まり、ドラコンの成文法が制定されて間もない頃、アッシリア帝国が新バビロニアとメディアの連合軍によって滅亡した。そしてギリシアの東方のアナトリア半島（現トルコ）では、その属州であった**リディア**が独立した。このリディア王国は、**世界初の鑄造貨幣**を生み出したことで有名である。ギリシア人が後に貨幣を鑄造したのは、このリディアの発明を学んだと言われている。

その後リディアは強国となり、アナトリア半島沿岸（ギリシア人はイオニア地方とよんでいた）に住んでいたギリシア人たちのポリスはリディアの支配権を受け入れた。またリディアも、先述したようにギリシア人の傭兵を貴重な戦力として受け入れていた。

リディアは紀元前6世紀後半にはアナトリア半島の東方に進出するほど強大化したが、そのタイミングはあまりにもまズかった。当時そこには新たな大国**アケメネス朝ペルシア**が存在していたのである。ペルシアによってメディア王国は滅ぼされ、新バビロニア王国も風前の灯火だった。そんな状況の中にリディアは飛び込んだのだった。リディアとペルシアの、オリエントの覇権をめぐる戦いが始まったが、結局リディアは滅ぼされてしまう。その後、反転したペルシア軍はオリエントを統一した。

この間イオニア地方のギリシア人ポリスは、リディアの滅亡で一度的に独立を回復したが、結局はペルシアの支配を受け入れることになった。ペルシアは各都市に代理人を送り込み、間接的な支配を行った。しかしそうしたやり方は、ギリシア人の自治を認めたリディアと違って、ギリシア人のメンタリティを無視する統治であった。これがギリシア人を怒らせたのである。ペルシアの政策ミスだった。イオニア諸都市は**ミレトス市**を中心に、**イオニアの反乱**を計画した。

この反乱は、時勢も見計らって行われた。前にペルシアのところで述べたように、ペルシアではオリエントを統一したカンビュセス2世が殺され、後継者争いの中で、ダレイオス1世が即位した。しかし、この継承がきっかけとなって、各地で反乱や独立の動きが起こった。ダレイオスは即位後9年間もこうした反乱の鎮圧に帝国中を駆けまわらざるを得なかった。ようやく国が安定したと思われたら、今度は遊牧国家スキタイとの戦争となり、ダレイオスは遠征軍を送るが、失敗に終わったのである。

ペルシアはかつてのペルシアではない。ダレイオス弱し。ギリシアに近く、古くからの交易相手であるスキタイ遠征の失敗がギリシア人にそう思わせた。ミレトス市は本土のギリシア人にも参加をよびかけ、アテネは参加することにしたが、スパルタは断わった。

アテネの参加には理由があった。それはこの反乱の真の原因にも関係があった。ペルシアはオリエント全体を統一した際、その海軍力をフェニキア人に頼った。当然、フェニキア人の生業である地中海交易は保護されることとなり、必然的に商売敵であるギリシア人にとって不利な状況になっていた。また、ペルシアと対立していたスキタイと密接な交易を行っていたギリシア人が、ペルシアに不利な扱いを受けるのも当然である。この反乱は、ギリシア人にとって、自らの生活と将来をかけた戦いであったが、商業に縁のないスパルタ市が不参加を決めたのも当然だった。

しかしイオニア都市の判断は誤っていた。一時はイオニア軍が旧リディアの首都サルデウスを占領するなどの戦果をあげたが、結局は物量・軍略すべてに勝っていたダレイオスの勝利に終わる。

ペルシアは敗者に容赦しなかった。反乱に参加したイオニア諸都市の神殿はすべて破壊され、若い男性はすべて去勢され、若い女性はすべて奴隷にされた。これらの都市は将来を担う一代を失ったのである。新たにペルシアが送りこんだ代理人が各都市を支配するようになり、イオニア諸国は完全に支配下に置かれることになった。

ただしダレイオスは愚かではない。今度は代理人に対し、ポリスの実情を把握して慎重に市政を運営するように命じた。また交易活動についても一定の配慮をした。そのため以後のイオニア地方は、ペルシアに対して忠実な地域となっていく。

ダレイオスの次なる目標は、イオニアの反乱に加担したアテネなどの懲罰である。ようやく国情が安定し

てきたとはいえ、まだ不穏な動きを示す地域は多かった。ここは見せしめのためにも、反乱を起こしたものを徹底的に罰せねばならなかった。ダレイオスは大軍をエーゲ海の向こう側に送りこむことに決めた。こうして起こったのがペルシア戦争である。

## ■ペルシア戦争の開始

ペルシア戦争とは計3回にわたって行われたギリシア侵略戦争である。この戦争の詳細は、現在ヘロドトスが記した記録集『歴史』しか残っていないため、客観的な事実は十分に明らかではないが、かなりの状況がわかっている。

まずはダレイオスが行ったのは、甥に一軍を与えて、アナトリア半島からギリシア北方にまわってギリシア諸ポリスに向かって南進するという作戦だった。『歴史』ではこれを第一次ペルシア戦争としている。しかしこの戦争は途中で海軍が突然の嵐に遭って多くの損害を出してしまい、陸軍も山岳地帯で原住民の襲撃にあって司令官が重傷を負ってしまい、結局は撤退している。しかしそれでもこの際にギリシア北方の多くの部族がペルシアの覇権を受け入れたため、それなりの成果は得られた。

次の第二次ペルシア戦争が、ギリシアの真の危機の始まりだった。ダレイオスは今度は前回とは比べものにならないほどの大軍で、陸と海からギリシアを攻め立てた。まず海軍はアテネを追放されて当時ペルシアに亡命していたペイシストラトス一族の地盤でもあったアテネ市の外港マラトン（Marathon）周辺を襲った。アテネはスパルタに応援を求めるとともに、近くのポリスの援軍を得て、奴隷にさえ武装させてマラトン周辺の防衛網を固めた。ペルシア軍は何とか上陸には成功したが、動く要塞である重装歩兵の自家本元のすさまじいほどの破壊力を見せつけられ、平地が少ない地形もあって得意の騎兵部隊を展開することもできずに敗退し、結局艦隊ごと退却せざるを得なかった。あまりに勝敗の決着が早かったので、スパルタの援軍が到着したときには、すでに戦闘は終わっていた。ペルシア軍の完敗、そしてアテネ側の完勝だった。

しかし勝利に沸くアテネ軍にはまだやるべきことが残っていた。実は当時、アテネ市内にはかつて無い大敵の襲来という事態に、不安感から起こった降伏論が高まっていたのである。もちろんペルシアから資金を得ていた党派やスパイもこうした市民心理を利用してこれを広めていた。アテネ軍は、一刻も早くこの勝利を市民に知らせる必要があったのである。

ローマ時代の歴史家プルタルコスが記した伝説によれば、このとき司令官に命じられたエウクレス（別の伝説ではフィリッピデス）という男が、完全武装、つまり10kg以上の重い武具を着けたままアテネ市まで走ってこの喜ばしい知らせ（ギリシア語でエヴァンゲリオン）を市民に告げた。しかし告げ終わるとたんに、心臓マヒでも起こったのかそのまま息絶えたという。ただしこの話、どうやら後世の作り話らしい。しかしこの話をもとにして現代になってオリンピックにマラソン（Marathon）競技が作られた。

この戦いはアテネ市民に大きな自信を与えた。当時、陸上で大敵と戦う場合には絶対に「歩く凶器」<sup>ワンマンアーミー</sup>集団であるスパルタ軍の助力がなければダメだという常識があったのである。しかしそのスパルタ兵無しでもアテネは勝てたのだ。これはアテネの国のあり方、民主主義に対する自信と確信を大いに高めた。アテネでは直後から市内にいた親ペルシア派の追放が始まり、陶片追放でその多くが町を去っていった。

しかし破れた方のペルシアは自信を失ってなどない。ダレイオスは敗戦直後から再度の侵攻を宣言していた。しかしその準備のための増税が原因でエジプトで反乱が起こったことから、ギリシアへの再遠征は延期せざるを得なかった。結局ダレイオスは遠征軍の出発を待つことなく亡くなっている。

ダレイオスの遺志を引き継いだのは、その子クセルクセス1世だった。初め彼はギリシア遠征には関心が薄かったが、エジプトの反乱が鎮圧されたことや、第



第二次ペルシア戦争

2次遠征の司令官たちの懇願を受け入れて3度目のギリシア遠征を開始した。第3次ペルシア戦争である。

クセルクセスは総勢52.8万人と豪語する大軍を編成し、ギリシア諸ポリスに降伏を要求した。ただしアテネとスパルタ以外、である。ペルシアはこの両ポリスは許す気はまったくなかったのである。

528万人。真実なら当時の西アジア全体の人口が2千万人ほどなので、その四分の一となる。もちろんこれは誇張である。

ペルシアの「本気」が伝わると、前の戦闘には関係のなかったポリスも事態を把握した。アテネの政治家**テミストクレス**は、スパルタと連絡を取り合って、ギリシア連合軍の結成を働きかけた。この結果、それまで何かと小さな紛争をくり広げていたギリシア諸ポリスの間で、オリンポスの祭典の期間以外で史上初めてすべての戦いが停止され、連合軍が結成された。ギリシア人も史上初めて本気になったのである。

連合軍は作戦協議を行い、その結果、陸ではテルモピュレー、海ではアルテミシオン海峡の2か所で迎え撃つことが決定された。テルモピュレーの地はギリシアの主要街道が通っているが道幅が狭く、ペルシアの大軍が来ても行動が限定される場所だった。アルテミシオン海峡も同様で、いずれも大軍を迎え撃つには最適の場所だった。しかしながらペルシア軍も前回の敗戦にこりており、万全の構えで来ることは間違いなかった。何よりペルシアの物量はギリシア軍を圧倒し、資金力も同様だった。長引けばギリシアに不利になることは明らかである。何としても早期にペルシア軍を圧倒することが重要だった。

協議では結局テルモピュレーはスパルタが中心となって守備をすること、そして海戦はアテネが中心となることが決定された。

しかし実際にペルシア軍が迫ってきた時、あいにくスパルタでは重要な宗教行事の最中にぶつかってしまい、戦いに派遣できるのがわずか300名だけとなってしまった。その後周囲のポリスの援軍が集まったためようやく5000人余りにはなったが、それでもペルシア陸軍の21万人に比べれば話にならない数だった。ペルシア軍のほうでも、兵力の余りの少なさに、何か奇策があるのではと疑い、数日周囲の様子を探らせたくらいだったのである。

それでも実際に戦闘が始まると、この地を決戦に選んだギリシア人の目の正しさと、歩く凶器スパルタ兵のすさまじさが証明されることとなった。狭い地形では兵の対戦は1対1に近い形にならざるを得ず、ギリシア側は疲れると後に下がって休憩をとることができた。一方ペルシア側は21万の兵のほとんどが戦いに参加することができなかったのである。このためペルシア軍は、初日1万人もの被害者を出しながら、まったくギリシア側の守備陣を崩すことができなかった。

そこで次の日、ペルシア側は情報網を駆使してようやく協道の存在を探し当てた（一説によればギリシア人からの密告があったという）。ペルシアの別動部隊がこの道を通して、ギリシア軍の向こう側に回ったことで形勢は逆転した。

ギリシア軍は急いで協議を行い、ほとんどの兵が自国に戻るようになった。結局最後まで残ったのは国王レオニダスを含むスパルタ兵300名と、他の義勇兵を合わせた1000名だけだった。彼らは生きて帰ることが絶望的であることを知りながら、大軍を釘付けにするためだけに残ったのである。

3日目の戦闘が始まった。1000人の兵は必死に抵抗し、中でもスパルタ兵300名の働きは抜きんできていた。彼らは最初は長槍でペルシア歩兵を圧倒したが、いかんせん数の少なさからじょじょに圧倒されていった。ヘロドトスの表現を借りれば「槍が折れれば剣に持ち替え、剣が折れれば素手や歯を使い」文字通



第三次ペルシア戦争



テルモピュレーの戦い(ダヴィド画)



り全軍が死ぬまで戦ったのである。戦闘が終わったとき戦場には彼らの10倍の敵兵の死体が倒れていた。後に彼らの勇敢さをたたえるために作られた墓碑には有名な詩人シモニデスによって作られた詩が刻まれた。「旅人よ、ラケダイモーン（スパルタの正式名称）の国人に行きて伝えよ。我ら御身らの掟のままに、ここに死にきと。」

一方のアテネでは、スパルタでさえもペルシア軍を撃退できなかったことで、アルテミシオン海峡での迎撃作戦の意味が無くなり、海軍はアテネに帰還した。こうして市民たちは、前回以上の不安感に襲われることになり、善後策を探るため、急いでデルフィの神殿に使いが送られ神託がもたらされた。しかしその内容は（実はだいたいがそうなのだが）、何とも理解に苦しむものだった。最初の神託はアテネ市の壊滅を预言する内容で、市民はこれで不安のどん底に突き落とされてしまった。そこでもう一度神託を求めると、その内容が「聖なるサラミスよ、ゼウスは、アテネがために木の壁を、唯一不落の塁（とりで）となし、汝らを救うべく賜るであろう。」というものだったのである。この「木の壁」が何なのかで議論が分かれた。ある人は木と塁という言葉から、昔アテネの町が木造の城壁で囲われていた時期があったことから、これは市の城壁内に籠城してペルシア軍をやりすごせば神が奇跡を起こしてくれるだろうと主張した。

しかし当時のアテネの指導者の一人**テミストクレス**は、熱心にこの「木の壁」を木造の軍艦だと主張したのである。軍事的な視点からすれば、アテネ市をペルシアの大軍から守る方法はなかった。敗戦となれば、アテネ市民の運命は、婦女子は奴隷とされ、男性は殺害されることが明らかだった。かくなる上は、女性は全員を避難させ、男性全員が軍艦に乗って戦うべし。それがテミストクレスの述べた軍略だった。しかも彼の戦略には根拠があったのである。

第二次ペルシア戦争の始まる3年前、アテネの郊外でラウリオン銀山に新鉱脈が発見され、臨時に大量の銀が産出された。そこでこの臨時収入をどうするべきかで、アテネの民会で議論が行われた。当時は、こうした収入は市民に平等に分けることが通例であったが、この時テミストクレスが熱心にこれを大艦隊建造の資金にすべきだと説いたのである。当時はダレイオス1世が亡くなったばかりで、後継者はギリシア遠征に不熱心という情報が伝わってきていた。しかしテミストクレスは独自の情報網（ペルシアの高官との交友関係があったらしい）から、ペルシアの再来はかならずあると確信していた。結局この時は、彼の意見が通って艦隊が建造されたのだが、それがこのとき活きたのである。テミストクレスはさらに情報網を活用して、アテネは海戦を避けて陸戦で抵抗するというニセ情報も流した。ただしこれは、アテネ滅亡という最悪の場合でも、自分がペルシアに内通したとして評価してもらうという保険の意味もあったという。まったく愛国者なのか売国奴なのかよくわからない人物である。



復元された古代の艦隊

結局ペルシアはこのニセ情報を信用し、ほとんど市民のいないアテネ市に入るとパルテノン神殿などを破壊した。その後、陸軍はスパルタをめざして西進した。一方海軍は情報通りにアテネ沖を通過して西進し、サラミス湾に入った。ここでペルシア海軍は意外なものを見た。情報にはなかったアテネの大艦隊である。それでもペルシア艦隊は700隻弱、ギリシア艦隊は400隻弱。艦の大きさも圧倒的にペルシア海軍のほうが大きかった。



パルテノン神殿(ドーリア式)

しかし戦争は、艦隊の大きさでは決まらないのが歴史の常である。さすがのフェニキア船員も、エーゲ海特有のアフリカから吹く強風を知らなかったようで、ペルシア海軍は翻弄された。さらにサラミス湾自体が、大艦隊の行動には狭すぎたし、ギリシア艦隊の船員も必死の操船で立ち向かった。そのため、数で圧倒していたはずのペルシア艦隊が敗退してしまったのである。勝利を確信したギリシア側は追撃してとどめを刺そうとしたが、テミストクレスは反対した。とどめを刺そうとすればペルシア軍が死にものぐるいで反撃し、かえってギリシア側が打撃を受けるとして断念させたのである。戦

術としては理にかなっていたので皆は納得したが、実は彼は密かにペルシア王に、自分がギリシア海軍の追撃を止めさせたと伝えて恩を売っていた。とにかくこの男は食えない人物である。

サラミスの海戦はペルシア戦争の流れの転機となり、以後の戦闘ではペルシアが後退を迫られることとなった。翌年には陸軍同士のプラタイアの戦いが行われ、満を持して準備していたスパルタ陸軍中心のギリシア軍がペルシア陸軍を粉砕している。同じ日に行われたミュカレの戦いもギリシア側の勝利に終わり、ペルシア軍は小アジア内陸部に撤退した。こうして戦争開始以来、ペルシア側に支配されてきたイオニア諸都市も再び独立を回復し、半世紀にわたってくり広げられたペルシア戦争は、ギリシア側の勝利で幕を閉じたのである。

## ◇ギリシア文明の衰退

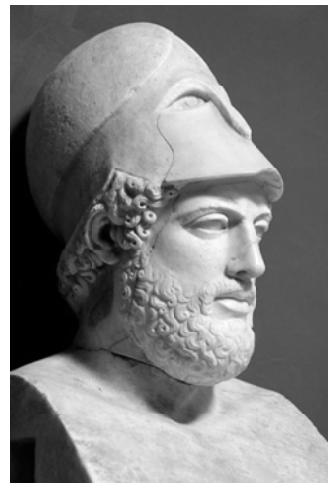
### ■アテネの絶頂期

しかしペルシアの政治は皇帝が変わるたびに大きく動くことをギリシア人は知っていた。当面の襲来はなさそうだが、いざというときには備えておかねばならない。そこでペルシア戦争の翌年出てきた構想が、ギリシア連合軍の永続化であった。いまで言うと、ヨーロッパのNATO（北大西洋条約機構）軍のようなものである。

NATOの本部は永世中立を宣言している小国ベルギーにあるが、このギリシア連合軍の本部もエーゲ海の小さな島国デロス島に置かれた。そこでこの組織は**デロス同盟**とよばれる。同盟の中心は、ふつうならスパルタとアテネとなるのだが、他国との同盟を望まないスパルタは結局、参加しなかった。結果としてこの同盟は、アテネ中心のものとなり、当然アテネが同盟の主導権を握るようになったのである。

やがてペルシアの脅威が薄れた前5世紀後半になると、アテネの指導者**ペリクレス**は同盟の金庫をパルテノン神殿内に移して財政の主導権も握った。彼は同盟の資金を「同盟の強化のため」と称して神殿の改修資金に流用し、反発して同盟を脱退しようとするポリスに対しては口実を作って罰するなど、次第に同盟を私物化した。そのためこの同盟の成立以後を「アテネ帝国」と表現する場合もある。

この時期のアテネ人の心理は、ペルシア戦争の勝利によって大きな変化を遂げていた。まず彼らは、自らの社会体制に自信を持つようになった。さらに戦争時の危機感の反動から生まれた、この戦争は文明人が野蛮人と戦う正義の戦争であるという思想（イデオロギー）から、ギリシア人は他民族より優秀であるとして、異民族を蔑視する傾向が強まっていた。危機感が、それを乗り越えた後に、過信や相手への蔑視につながるの、アヘン戦争後のイギリスなど歴史上しばしば見られる現象である。



ペリクレス

さらにペルシア戦争はアテネ社会に大きな変化をもたらしていた。戦争で大活躍をしてギリシアの危機を救ったのは、従来戦闘の中心であった比較的富裕な市民からなる重装歩兵ではなく、従来なら自費で武器を購入できずに戦争に参加さえできなかった下層市民層であった。彼らはサラミスの海戦では体一つで軍艦に乗りこんでペルシアの大艦隊を打ち破った、今回の戦争の最大のヒーローだと思われていた。

アテネの政治はクレイステネスによって民主化がなされ進められていたが、その体制はまだ富裕市民中心の政治であった。しかしペルシア戦争での貧民層の大活躍が、「政治に参加するには、国（ポリス）のために尽くさねばならない」という原則が、彼らに有利に働いた。市政における貧民層の発言力が一気に増大したのである。ただし、こうした民主化の恩恵からはずされていたのが女性である。スパルタのところで述べたように、アテネでは女性の地位は非常に低く、参政権は外国人や奴隷と同様持っていない。さらに子を産む事が強調され、家では常に家父長の命に従うようにされていたのである。

戦争後のアテネの政治状況を最大限に利用したのが、先述したペリクレスである。彼は下層市民の支持を

背景に政治改革を行い、公職をすべての市民に開放し、希望者が抽選でなれるようにした。さらには当時の議員は無給の名誉職であったが、下層民でも議会に出席できるように議員に給料を出すようにした。つまりどんな市民でも、やる気と能力さえあれば確実に政治に参加できるようにしたのである。これは民主主義の最高段階、理想的な姿として古くから称えられているやり方だった。

ただし理想はかならずしも現実とは仲が良くない。素人のやる政治は試行錯誤の連続となる。事情をよく知る者からすれば最悪の決断が行われる体制でもある。なのにアテネの市政は非常にうまく行った。それはペリクレスが黒幕として君臨していたからだ。彼はクレイステネス改革の際に設けられた役職、軍人のトップである將軍職が陶片追放制度の対象外である事に注目し、軍人の世界から出世して政治に関わった。彼の演説のうまさ群を抜いていた事も、彼を政界の中心人物にした。彼は自分の最大の魅力である演説を武器にして、約30年余りの間、アテネの民会を牛耳ったのである。

当時のアテネの政治制度は、今日のように権力が分立されておらず、民会が立法・司法・行政の最高機関を兼ねていた。そしてすべての決定が論壇において、演説家同士の激しい論戦で決まったのである。すばらしい演説に対しては、政敵であっても立ち上がって拍手を送る、そんな雰囲気があった。つまりペリクレスはこの時代最高の武器を持っていたのである。

彼は議員に対し、慎重に、かつ絶対的な影響力を行使した。この状況を見て、後のローマ時代の歴史家トッキディデスが「形式上は民主主義、しかし事実上はペリクレスの独裁」と表現したくらいだった。アテネの市民も彼を「地上のゼウス」と表現している。

## ■ペロポネソス戦争

アテネの事実上のギリシア支配に、最も反発したのがスパルタだった。同盟の資金を流用して強大化する一方のアテネを脅威に感じており、その力を怖れて他のポリスが相対的にスパルタを軽んずる傾向にも反発していた。しかし何よりアテネ風の政治体制、すなわち全市民が参加する民主主義が広まることが問題だった。というのも、それがスパルタ国内の隷属民の独立心に火を付けていたのである。

こうして次第に両ポリスの関係が悪化した。そしてその争いは、アテネ中心のデロス同盟と、古くからあるスパルタ周辺のポリスの軍事同盟ペロポネソス同盟との対立という形になっていった。

ペリクレスはこうした事態に対し、まだ正式に終結していないペルシアとの和平条約を締結しようとした。こうして結ばれたのがカリアスの和約（前449年）で、3年後には一旦スパルタとも和平条約を結ぶことに成功した。これはペリクレスの名をいっそう上げることとなったが、根本的な問題が解決していない以上、これで済むはずがなかった。案の定、両者の対立は前431年戦争に発展する。**ペロポネソス戦争**である。

ペリクレスは当初、強力なスパルタ軍と直接対決して万が一にも敗れて自分の責任になることを避け、籠城して様子をうかがおうとした。しかし、その彼を不運が襲った。城門を固く閉ざしていたアテネ市内で、伝染病が発生したのである。それでも籠城を続けようとする彼に、アテネ市民の不満が高まった。その後、彼自身も病気に冒され死亡する。この伝染病は、かつてはペストだと言われていたが、最近ではインフルエンザかマラリアではないかと言われている。

ペリクレスの死がアテネに与えた打撃は大きかった。以後のアテネ市は、操る人のいない操り人形が、好き勝手に振る舞うように見えたようだ。このため、この時代のアテネを評して「衆愚政治」という言い方がある。

実はこの時期のアテネの失敗は、独裁政治につきものの失敗だった。独裁者は民衆から都合の悪い真実を隠す。真実を知らない民衆は、必ず誤った判断を冒す。ペリクレスは民主主義の場がありながら、そこに真実を提供することを怠ったり、自分に都合がよいように見せていた。それは陶片追放という、地位を保つのが難しい制度を持つアテネの政治体制において、長く政権を握るために最適な方法だったからである。アテネ市民は、民主主義の場は持っていないが、民衆が正しい判断をするための情報入手の方法を持っていなかったのである。それがアテネ、というかこの時代一般の政治体制の欠陥だった。

ただし、もともと民主主義には衆愚政治となる可能性が織り込まれている。20世紀を代表する政治家で、英国首相であったウィンストン＝チャーチルが、彼独特の皮肉った言い方で「民主主義は最悪の政治といえ

る。これまで試みられてきた、民主主義以外の全ての政治体制を除けばだが」と言ったように、民主主義には常に指導者や民衆の誤った判断がつきものである。それでも民主主義は、他の体制よりはましなのである。

たとえば有名なソクラテスの弟子で、美貌の持ち主で人気のあったアルキビアデスなどは、軍司令官に就任するとスパルタの同盟都市への遠征を提案し、大失敗してしまう。情勢判断の誤りが原因だった。その結果に焦った彼は、次々と次策を打ち出すが、判断の誤りが修正されなかったことから、失敗を重ねた。陶片追放を恐れた彼は逃亡し、最後は亡命先でスパルタ側の送った暗殺者に殺されてしまう。

また民会の判断も迷走した。真実がわかっていないアテネ市民は、国民受けする発言をするデマゴーク（扇動政治家）の意見に翻弄され、間違った判断をし続けた。デマゴークには、1年前と意見が正反対になっても気にしない人が多かった。

ペロポネソス戦争も、アテネが勝てるチャンスはもちろん、引き分けにするチャンスさえ何度もあった。なのにアテネは失敗し続けた。しかしそんなざまにもかかわらず、アテネはまだ30年近く戦争を続けることができた。それほどアテネの国力は、他国を圧倒していたのである。

しかしとうとうアテネが破れる時がやってきた。戦争開始から20年も経つと、アテネの迷走は同盟都市の不信感を買ひ、離反の動きが表面化した。しかしアテネにそれを押しとどめる力は残っていなかった。それにともなって同盟資金は先細り状態になっていく。さらに軍事的にもスパルタが、アテネの近郊に要塞を築くことに成功した。その上、亡命政治家の扇動で、アテネの資金力の源泉であった鉱山の奴隷が反乱を起こし、銀の産出が止まってしまう。これでアテネの戦争資金は枯渇してしまう。またスパルタは、この時期海軍を持つにいたっていた。このスパルタの変化の様子は、ペルシア戦争時のアテネを彷彿とさせた。

そして、このできたてはやはやのスパルタ海軍に敗れ、市の食料供給ルートを断たれたことが、アテネの致命傷となった。アテネは降伏し、デロス同盟は解体された。アテネ市の政治は30人の親スパルタ勢力による寡頭体制に支配されることになった。それでもまだ、アテネの国力や人材には他都市を圧倒するものがあつたが、この町の全盛期を終わらせたのは、その後起こった深刻な内乱だった。

寡頭政権はすぐに、富裕市民を中心とする市民の反発で倒されてしまった。スパルタも、それ以上アテネ政界の混乱に巻きこまれることを避けようとしたため、共和政が復活した。しかしその後、アルキビアデスらの敗戦の責任を問う論争から内紛が発生し、市民を真っ二つに引き裂いてしまう。激しい憎悪はわずか1年間で、30年続いたペロポネソス戦争の戦死者と同じ数の死者をもたらしたと言われている。

内乱は最終的に、見るに見かねたスパルタ王が仲裁して終わるが、その条件は両派がこれ以上責任を追究し合わないというものだった。片方のグループにはアルキビアデス同様、ソクラテスの弟子が数多く含まれていたが、内乱後は彼らのような有能な人材は根こそぎなくなり、消え去らない憎悪はアテネの国力を確実に奪った。そしてこのときの煮え切らない解決策が、後に哲学者ソクラテスの死につながってしまうのであるが、これについては後のギリシア文化のところで改めて述べよう。

## ■ギリシアの混迷

アテネの敗北後、ギリシアの支配権はスパルタが握ることになった。その結果、スパルタは全ギリシアの盟主として振舞うことが要求されることになる。すなわちすべての国が経済的に繁栄するような、ポリス間の調整役をするようになったのである。当然そういう役割をすれば、スパルタ人の嫌う貨幣経済にいやでも関わることになってしまう。スパルタ市民の中には、貨幣経済にうまく関わった市民とそうでない市民との間で次第に貧富の差が目立つようになり、リュクルゴス体制は崩壊の危機に陥った。天下無敵のスパルタが、ギリシアの覇権を握ったことによって弱体化するという皮肉な結果になったのである。

この弱体化したスパルタを破って新たな覇権国家となったのが**テーベ**（テーバイが正式名。エジプト王国の首都とは別）だった。しかしその覇権は、あまりにも指導者エパメイノンドスの能力に負う部分が多く、彼が戦死すると続かなかった。さらにその後のギリシアには有力な都市が出てこなくなり、混迷が続いた。

こうしたギリシアの混乱の背景に、自然環境の悪化という要因があることがわかってきた。実はペルシア戦争の頃から、ギリシアの山々から森林が消失する事態が起っていた。戦争のためギリシアでは、短期間に大量の軍船を建造する必要に迫られ、山の木が大量に伐採された。それだけでなくギリシアの産業はオリ-

ブやブドウ生産を主とする農業である。これらの作物の栽培にとっては、うっそうとした森林は不要であり、豊かな土壌に生える雑草は栽培の大敵である。ワインやオリーブ油を詰める壺も、焼くためには大量の薪が必要であった。こうした森林伐採の進行に、最後のとどめを刺したのがペルシア戦争だった。ギリシアの森林は、前7世紀から前5世紀にかけて、かなりの面積が失われたのではないかと推測されている。

森林が消滅すると、雨が降ってもそれを受け止めてくれる下草がないため、露出した表土はすぐに泥水となって流出し、海に流れ込んでしまう。このため河口は大量の泥土で埋まり、しだいに湿地帯に変わっていく。こうした場所には慢性的に蚊が発生するようになり、蚊が媒介するマラリヤがギリシア人を苦しめるようになる。ペロポネソス戦争でマラリヤがアテネで広まったのは、こうしたギリシア人の自然破壊が原因だった。有名なプラトンも、前360年頃に書いた『クリティアス』の中で「国土が大洪水に襲われ、高地から流れ出た土砂は、渦を巻いて流れていき、海底の奥深く消え去った。肥沃で柔らかな土壌はことごとく消失し、やせ衰えた土地だけが残された」と書いている。自然破壊は、ギリシアの衰退に大きな影をおとしていたのである。

## ■ギリシアと奴隷制度

ところで、これまであちこちに登場してきた奴隷について、ここでまとめておこう。奴隷とは古代世界のほとんどで見られる制度で、日本でも古代に奴婢という名で存在した。奴隷はおもに戦争の敗者や捕虜となった者が勝者によって売られたり、あるいは自ら借金が返済できない場合に自らや家族の者によって奴隷に売られたものである。

奴隷制度については現代でもこの状況は変わっていない。貧しい国々では家族の借金を返済するために家族が奴隷売買業者（普通は人材斡旋業者という名前を持っている）に娘や息子を買ったり、あるいは業者が自ら幼児や若い男女をさらったりする形で奴隷制度は続いている。あなたの周囲に、外国人の若い女性が昼間小さなアパート内で、押し込められるかのように共同生活をしていたりすれば、それは現代の奴隷制度の犠牲者なのかも知れない。またワーキングプアとよばれる人々も、しばしば違法すれすれの低賃金労働を強制されているという点では、現代の奴隷と言えるかも知れない。

古代の奴隷は、しばしば「物言う家畜」として扱われた。奴隷の購入者はその人格のすべての所有者である。これは奴隷には、人権を考慮する必要がないことを表している。つまり奴隷がケガをしたり病気になったとしても、治療をするか命を救うかは、所有者の判断によると言うことなのである。気に入らなかったり、反抗的な奴隷を所有者が処罰することは、奴隷主の当然の権利と考えられており、結果として奴隷が死んだとしても、それが法に触れたり問題になることはなかった。

ただし現実には、虐待が行われることはあまり無く、特に家内奴隷（家事や家庭教育など家庭内で使われる奴隷）の場合はほとんど無かった。というのも、現実の奴隷はかなりの額を払って購入された贅沢品であった。乱暴にできるはずがないのである。我々は奴隷という言葉を聞くと、ついつい18～19世紀のアメリカ大陸においてひどい扱いを受けた黒人奴隷のことをイメージするが、あれは長い奴隷の歴史からすれば、全くの例外的なものなのである。あれでもって奴隷をイメージしてはいけないのである。

戦争が行われれば、当然多くの捕虜がでるが、それらを売る権利は軍の司令官にあるのが一般的だった。したがって戦争の現場では、洋の東西を問わず、奴隷の獲得と戦場での略奪行為が司令官と兵士の副収入とされ、実際のところ、これがなければ兵士は集めにくいのだった。また、奴隷の価格は、他の商品と同じく需要と供給の関係で決まり、大戦争が起これば供給過剰で価格は下落し、平和な時は供給不足で高騰した。

話はギリシアに戻るが、ギリシアの奴隷は植民都市の周辺から奴隷狩りで連れてこられた者や、オリエントの奴隷市場で買われてきた者が多かった。前述したように、貴族政の末期には、借金から自らの身分を売って奴隷になる者が急増し、それがアテネ民主化の発端となった。



奴隷市場（古代エジプト）

ギリシアでは奴隷の地位はオリエントに比べれば比較的高く、特に知的な能力の高い家庭内奴隷は子弟の教育にたずさわったり、主人の仕事の補佐をすることが多く、家族の一員としての扱いを受けることも多かった。そのため奴隷の解放が行われることも珍しくなかったし、解放奴隷と結婚する者さえいた。

奴隷解放とは、ある奴隷を決まった手続きをとって奴隷身分から解放することで、それ以後は市民と同じように暮らすことができたのである（ただし市民権はなかった）。古代ギリシアでは、『イソップ物語』で有名なイソップ（正確にはアイソプス）も解放奴隷だったという話が残っている。ローマ時代になると奴隷解放はいっそう多くなるが、それはまたローマのところで述べることにしよう。

ギリシアでは、それほど知的能力が高くない奴隷は、女性なら家庭内労働、男性なら肉体労働につく者が多かった。多くの自由市民は奴隷を1人か2人所有しており、アテネのラウリオン鉱山の鉱夫奴隷のように、国家が数百人も所有する場合もあった。

市民は奴隷のおかげで、きつい肉体労働をせずに済んだ。そのため市民の仕事は、計画を立てたり、判断をするという仕事、すなわち頭脳労働に限られることになったのである。このためアリストテレスでさえ、「奴隷は肉体によって所有者に奉仕する」といって、奴隷制度の存在を当然視していたくらいだった。結果として当時、汗水たらして働くことは奴隷の仕事とされ、一般的には蔑視されていたのである。



19世紀の奴隷の男性

## ◇ヘレニズム時代

### ■マケドニアの台頭

ギリシアの諸ポリスが衰退し、抗争をくり広げていた時に、着実に力を増していたのが北方の**マケドニア王国**だった。マケドニアはスパルタと同じくドーリア人が作り上げた国だったが、南下をせずに北方に留まったために、同じギリシア人でも王政という古い形態の社会を維持していた。

そのマケドニアが強大化したのは、資源のおかげだった。マケドニアは山国で、もともと鉱物資源にも恵まれており、木材資源は無限に近いほどあった。前述したように、ペルシア戦争後のギリシアでは森林資源が不足するようになっており、それを求めてギリシア商人が数多く訪れるようになっていた。またマケドニアは、ペルシア戦争の際にはペルシア側について軍事拠点となったが、ペロポネソス戦争のときには中立の立場を貫き、国力の消耗を防いだのである。

そのマケドニアがギリシアの有力国家となったのは、**フィリッポス2世**の時代であった。彼はまだ幼い頃、人質として当時の強国テーベに送られた。その際にギリシアの覇権を握った絶頂期のテーベと、指導者であるエパメイノンドスという人物を、直に感じる事ができたのである。

やがて帰国して王位に就いたフィリッポスは、積極的にギリシア本土のすぐれた文化や技術を導入した。またギリシア各地から優秀な人材を集め、金銀鉱山の開発で得た軍資金を活用して周囲のポリスを次々と征服した。こうして彼はみるみるうちにマケドニアをギリシアの強国に育て上げた。

当時ギリシアの覇権を握っていたテーベはこれに危険を感じた。さらに国力を回復していたアテネでも、指導者デモステネスの考えに沿って、反マケドニア政策をとるようになった。反マケドニアで結束したアテネとテーベは連合軍を組んでマケドニアを挑発した。こうして起こったのが前338年の**カイロネアの戦い**である。

フィリッポスはギリシア人の得意とする重装歩兵戦法と、ペルシアから取り入れた騎兵を駆使した戦法を組み合わせる連合軍を打ち破った。その後ギリシア諸ポリスは形式的にコリント市に本部を置く**コリント同盟**（ヘラス同盟ともいう）に組み入れられたが、実際はマケドニアの属国となったのである。ここにはじめてポリスは独立を失った。

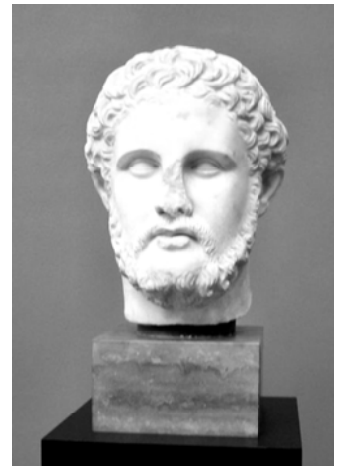
全ギリシアの王となったフィリッポスは、諸ポリスの反発を抑えるためもあって、ギリシアの内政に露骨に介入し、ポリス間抗争の黒幕となっていたペルシア帝国を打倒することを宣言した。これには多くの賛同意見があったが、はたしてフィリッポスがどこまで本気だったのかはわからない。それにこの計画は結局、実現しなかった。彼が翌年、暗殺されてしまったからである。手を下したのはマケドニアの貴族だったが、その動機ははっきりしない。あとを継いだのはまだ弱冠20才の王子アレクサンドロス3世、後の**アレクサンドロス大王**であった。

アレクサンドロスについては多くの逸話が残されており、エピソードにこそ欠かない。その中から彼の人柄や能力を表わすものを紹介しよう。

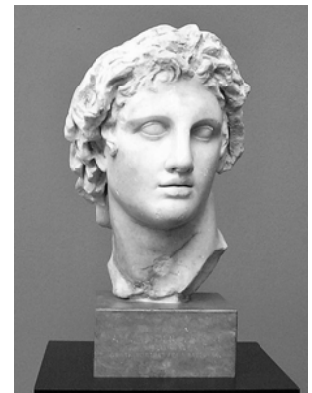
彼が生涯を通じて可愛がった愛馬がブケファラスであるが、はじめこの馬は父に売られる予定だった。ところが馬商人が王に見せた時、馬は人が近づくと大暴れし、どうしてもおとなしくならなかった。「天馬」という売り文句に、初めは買う気が満々だった王も、だんだん気が失せていった。

そこで、まだ少年であったアレクサンドロスが、自分がこの馬を落ち着かせて乗りこなせたなら、自分用に買ってくれるかと父に聞いたのである。

父は、子供がそんなことできるわけがないと思って安請け合いの返事を



フィリッポス2世



アレクサンドロス大王



した。家臣たちは、暴れ馬に王子が蹴り殺されてでもしたら大変だとハラハラしたが、アレクサンドロスは馬商人から手綱を受取ると、馬の向きをクルリと反転させた。すると今まで大暴れしていた馬が、急におとなしくなった。さらに王子が手綱を引っばると、一緒に歩き始めたのである。

アレクサンドロスは、馬が十分落ち着いたと見るや、ぱっと飛び乗った。そして初めは驚いて暴れる馬の動きに任せたが、やがて馬の興奮が鎮まると、「ハッ」と声をかけて腹を蹴って広場中を駆けさせた。馬は彼の思うまま、力強く王宮の庭を駆け回った。その姿は商人の売り文句の通り、天馬が空を飛ぶようであった。最初は心配して見ていた人々も、これを見てワッと大歓声を上げた。フィリッポスも感激して、思わず玉座から駆け降りると、馬のそばに降り立った息子を抱き寄せて「ああ、我が子よ。おまえは何というやつだ。マケドニアはお前には狭すぎる。お前はお前にふさわしい国を探すがよい」と言ったという。

また後に父フィリッポスが全ギリシアの王になったときには、ほとんどの家臣がよろこぶ中、アレクサンドロスだけがブスッとしていた。不審に思った幼なじみが理由を聞くと、彼は「父上がすべてやってしまったら、私と君らがやる仕事が無くなってしまわないか」と言ったという。

アレクサンドロスの非凡な能力を知った父は、息子に最高の教師をつけようとした。そして選ばれたのが**アリストテレス**である。後に古代最大の哲学者と言われる学者だった。その頃アレクサンドロスはまだ12歳であり、アリストテレスは41歳だった。当時彼は、師のプラトンの学校アカデメイアの教授を辞めて帰国したばかりで、彼の父が王家に世話になっていたという縁があった。哲学者はこの若くて聡明な王子を可愛がり、全知識を駆使して教育した。王子も師から学問に対する興味と尊敬、そして物事の正しい見方を学んだ。二人の師弟関係は、皇子が即位するまでの12年間だったが、その後も二人は手紙のやりとりを続け、哲学者は王子の死の間際までアドバイスを送り続けたという。

アレクサンドロスは父の死を知って反乱を起こしたテーベ市を即座に打ち破ると、見せしめとして完全に破壊し、市民全員を奴隷に売った。新国王の果敢な処置で、動揺していた諸ポリスは恐れおののき、コリント同盟は再確認されて、マケドニアの覇権が揺らぐことはなかった。アレクサンドロスはこうして父の地位を実力で継いだ。

しかし父がかつて言ったように、もう彼がギリシアでやるべきことはあまり無く、無為に過ごすには若すぎた。そこで彼は父が表明しながら果たせなかった、ペルシア帝国の征服に取り組んだ。最初人々は、彼の発言を真剣に受け止めなかったが、王の命令であるので、嫌々ながらも従った。しかしペルシアの内政干渉を不快に思っていたポリスの中には、征服は無理としても、少しは干渉を抑えられないかという期待をもって参加者を出した町もあった。

## ■アレクサンドロスの東方遠征

アレクサンドロスの遠征は前334年に開始された。最初のグラニコス川の戦いでは、攻め寄せたペルシア軍4万を、半分の2万の兵でうち破り、全ギリシア兵の信頼を勝ち得るとともに、ペルシア側に恐れを植え付けた。

翌年の**イッソスの戦い**では、アレクサンドロス軍も3万に増えていたが、ペルシア皇帝ダレイオス3世が自ら10万を超える大軍で攻め寄せて来た。形成は圧倒的に不利だったが、始まってみると、アレクサンドロスの巧妙な戦術の前に、やはりペルシア軍は総崩れになった。

この大勝はペルシア帝国に深刻な打撃を与えた。アレク



巧妙な戦術：彼の強さの源は、その戦法が画期的だったことである。ギリシア伝統の重装歩兵の密集戦法に、オリエントの騎兵隊を組み合わせたもので、状況に応じて柔軟に対応できるものだった。彼の戦法は、後世の例えば後述するハンニバルも大いに参考にした。

サンドロスがその後エジプトに進攻したときには、エジプト人は彼を解放者と呼び、ファラオとして出迎えた。エジプトが気に入った彼は、ナイル川の河口部に自らの名を付けたギリシア風の都市を建設する。これ

アレクサンドリア:エジプトではその後7世紀ごろまで長らく西アジア屈指の大都市として経済・文化の中心都市として栄えた。アレクサンドリア図書館は古代最大の知の中心地であったし、ムセイオンという一種の大学がヘレニズム文化の中心となった。市はその後一時衰退するが、海の道の繁栄とともに東西貿易の拠点として繁栄を回復するが、ポルトガルのインド航路開拓とともに衰退する。これ以外のアレクサンドリアもその後イスタンブールとかイスタンダリアという名で現代まで残っている。

仏教の守護神の韋駄天(足の速い神)の原型となった神スカンダもアレクサンドロス伝説が基だろうという説がある。

が後に彼の後継者たちが各地に作った植民都市のモデルとなる**アレクサンドリア**市だった。

アレクサンドロスはこの頃エジプトの信仰に興味を持ち、西方にある有名な神殿に詣でた。そのときの神託で、自分が神の子であり、世界を征服する運命にあることが告げられた。そして、この頃からアレクサンドロスの態度が変わっていった。

まず先に述べたように、アレクサンドロスはアリストテレスに学問を習っていた。当時ギリシアは異民族をバルバロイ（野蛮人）とよび、実際はそうではないのだが、自分たちの方が文化レベルが高いと信じていた。これは偉大なアリストテレスさえ同じであり、彼はアレクサンドロスに、バルバロイを動物のように扱えと教えていた。しかしアリストテレスから物の見方を教わっていた大王は、自分の目でオリエントの文明レベルの高さを知ると、師のアドバイスを捨てて、オリエントの人々の意見を採用するようになるのである。

エジプトでしばらく休息をとったアレクサンドロスは戦いを再開した。ペルシアとの最後の決戦は、ペルシアの本拠地イラン高原に入る入り口、アルペラ（現在のモスル市近くの町）の近くのガウガメラ平原で行われた（**ガウガメラの戦い**、またはアルペラの戦い）。アレクサンドロス軍の5万に対し、ペルシア側は総勢20万と豪語していた。しかし今度も戦いが始まるとすぐダレイオスは逃げてしまい、ペルシア軍は総崩れになった。これで運命は決まった。大帝国の運命は若き大王の手に委ねられたのである。

アレクサンドロスはバビロンやササといった主要都市を制圧すると、これらを破壊・掠奪した。神聖都市ペルセポリスも徹底的に破壊され、宮殿は炎上した。しかし彼は、帝国の支配組織そのものにはほとんど手を付けず、そのまま維持した。事実上彼は、帝国の新しい支配者となったのである。そしてそれこそが、アレクサンドロスが短期間で「大征服」を成し遂げられた原因だった。つまりその実態は征服と言うよりは乗取りであり、アケメネス朝ペルシアがアレクサンドロス朝ペルシアになったようなものだった。

ペルシア征服の後、ここらで軍を休めたいという意見も強かったが、彼は逃亡したダレイオス3世の追跡を命令した。ダレイオス自身はガウガメラの戦い以後同行した家臣とともにイラン高原を東へと逃げていたのだが、逃避行に疲れた家臣たちの裏切りにあって殺害されてしまう。末期の際に間に合ったアレクサンドロスは皇帝に末期の水を飲ませて手厚く葬ったという。

彼はその後も世界の支配者になることを夢見て東方への進軍を続けた。しかしあまりに長く故郷を離れて戦い続けたため、軍内にはしだいに不満と不安がたまっていった。ちょっとしたことでけんかが起こるようになり、根拠のない噂が広まって、それが原因の殺人事件さえ起こったのである。軍内には不穏な動きが頻繁に見られるようになった。そんな中の話を紹介しよう。

もともと大王はそれほど身体が強いわけではなく、気候が少し変化しただけで熱を出してしまう体質だった。あるとき、大王は高熱が出て、侍医に薬を求めた。侍医は彼に薬を処方し、手渡した。彼はそれを受け取ったが、その代わりに一枚の手紙を手渡した。それは匿名の告発文であり、侍医が実は敵に買収されており、処方された薬を飲むと危険だから注意しろという内容だった。しかしアレクサンドロスは何も言わずに黙って薬を飲むと横になった。侍医も黙って静かに手紙を読んでた。薬の効力のため、大王はそのまま意識を失ってしまった。しかしその後、熱も収まって意識を取り戻した大王は、以前と同じように現場に戻り、侍医も黙って以前と同じように大王を看護した。リーダーとはかくあるべきという話である。

その後も軍内の不穏な動きは収まらず、不信感が不信感を生んで、とうとう王の暗殺未遂事件まで起こった。そのため彼は、マケドニア以来の家臣を処刑することになってしまう。精神力がずば抜けて強かったアレクサンドロスだったが、この頃には孤独感と不信感に苦しむようになり、ノイローゼになっていた。

侵攻先の民族の抵抗も、アレクサンドロスの声望が高まるに連れて激しくなり、ソグド地方を制圧した際の抵抗の激しさには、さすがの彼も精根尽きるほどだった。結局インダス川を越えたところで、部下たちの猛烈な反対に出会ってしまい、さすがの彼も軍を引き返すことに同意した。

ブルタルコスによれば、このとき大王はチャンドラグプタという名のインドの若者と出会って話したと言われているが、真実かどうかは分からない。もし会っていたとしても大王には彼の将来など分かるはずもな

チャンドラグプタ:後にインド最初の統一王朝マウリヤ朝を建国する。

かっただろう。

## ■アレクサンドロス帝国とヘレニズム時代

先述したように、彼は遠征中に大帝国の体制を、ギリシア風からペルシア風に変えていた。まず彼はギリシア人の部下に対しては、王に対する部下の礼をギリシア風の軽い敬礼から、オリエント風の跪いて最敬礼する形に変えた。また、妻子のいない者にはオリエントの女性との結婚を命じ、東方遠征の帰還後には1万組もの集団結婚式をとり行なった。融和策は新たに家臣としたアジア人に対しても行われ、インドに向かう際には、オリエントの有力者の子弟から優秀な人物を3万人ほどを選んでギリシア語と戦術を教えている。こうした努力は、時間をかけて実行され続ければ、おそらく何かしら大きな実を結んだだろう。しかしその時間というものが、彼にはなかったのである。

新たな帝国の首都と定めたバビロンに帰還して間もなく、大王は熱病を発症し、急死した。すでにアラビア南方への遠征の用意が進められていたが、実行されることはなかった。大王の最後の言葉は「我が帝国を最強のものに残す」だったという。結局アレクサンドロスの帝国は、形になる前に建国者の死という事態で幕を閉じたのである。アレクサンドロスにはまだ幼い遺児がいたが、その後の権力争いの中で殺されてしまう。彼の王朝はこうしてあっという間に幕を閉じたのである。

アレクサンドロスの跡を継ぐ「最強のもの」を目指し、部下の間で後継者争いが勃発した。これを後継者を表すギリシア語から名付けて**ディアドコイ戦争**という。戦争は20年近く続き、一時はアンティゴノスが大帝国を継承するかに見えたが、前310年の**イブソスの戦い**で致命的な敗北を喫し、最終的に本国マケドニアはアンティゴノス朝、エジプトは**プトレマイオス朝**、そしてシリアからインドまでの大半の地域はセレウコス朝が支配することとなった。

その後もギリシアからインドまでの地域で、後継者たちの争いが続いた。その中から東方ではインドに近い地域で**バクトリア王国**が生まれ、イラン高原の東北方面（ホラサーン地方）で**パルティア王国**（アルサケス朝）が生まれ、アナトリア半島ではペルガモン王国やポントス王国が生まれた。

しかしこれらの諸王国はほとんどが同じ文化、ギリシア文化とオリエントの文化が混じり合ったものが広がった。まず支配者同士は簡略化されたギリシア語を話していた。これがヘレニズム世界の共通語である**コイネー**であり、オリエントでは次第にかつての共通語アラム語にとって代わっていく。ただしアラム語はもうしばらく商業面の共通語として使われ続けた。コイネーはその後東地中海世界の共通語として使われ続け、『新約聖書』もコイネーで書かれた。また現代ギリシア語もコイネーが元となっている。

このようにヘレニズム時代は、ギリシアのオリエントという異なった文化の融合の時代だった。オリエントとギリシア、インドの文化が伝わり、融合した。例えばヴェーダ時代から数学が盛んであったインドには、ヘレニズム文化が大きな刺激を与えた。4世紀初めに成立したグプタ朝では、オリエント世界から伝わった数学や天文学が発展し、7世紀にはブラーマグプタ、12世紀にはバースカラといった数学史上に残る天才を生むことになる。そしてこの、インドで育まれた数学や天文学が、8世紀にイスラーム帝国が成立して東西交流を大きく活発化させたことで、科学が生まれるのである。

## ◇ギリシア・ヘレニズム文化

### ■ギリシアの自然哲学

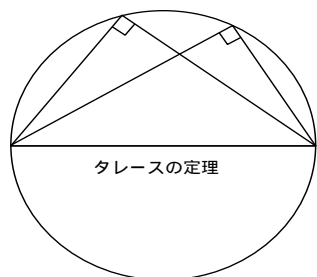
ギリシア文明が残したもので、最大の遺産は自然哲学である。自然哲学とは古代ギリシアに始まった特有の思考様式で、自然や人間の観察からその根本のしくみに対する問い、そしてその中から一般法則を見つけ出そうとするものであった。つまり宇宙はどのように始まったのか、すべてのものは何から作られているのか、そして自然の中にはあるものに多い少ないがあるのはなぜか、さらにそれらがなぜ数というもので説明できるのか、などである。

まずこうした問いが現われたのはギリシア本土ではなく、本土より早く経済的に発展したエーゲ海のアナトリア半島側、ミレトス市を中心とするイオニア地方だった。ここでは早くから奴隷制度が発達し、自由民は日常の労働から解放されて思索をするのに十分な暇と資金があった。

この学派に属する思想家として最初に**タレス**を挙げておこう。彼は当時学者たちの間で問題になっていた「すべてのものは何でできているのか（万物の要素**アルケー**は何か）」という問いに対し、**水**であると考えた。彼は大地は水の上に浮んでいると考えていた。他にも古代エジプトの記録から、日食の起こる日を予言したという。ただしこれは、日食がなぜ起こるのかと言うことからではなく、周期が何年ごとで前回が何年何月だから次回は何年何月頃だろうというものだったようだ。彼はこのように、興味を覚えたものは徹底的にデータを集めて考え抜くという方法で、自然界のさまざまな理論法則を発見した。彼が発見したもので現在最も有名なものは「**タレスの定理**」であろう。「直径に対する円周角は、直角である」というもので、幾何学の初歩として多くの人に知られている。



皆既日食



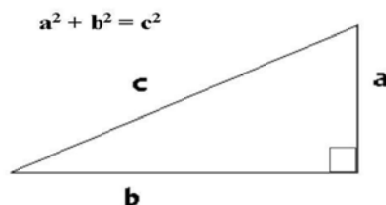
タレスの定理

タレスにはいくつかの逸話が残されている。あるとき学問なんて役に立たないといわれて怒ったタレスは、天体観測からその年はオリブが豊作だという予想を立て、まだ冬のうちからオリブの搾り機の「使用権」を買占めてしまった。実際秋になってみると予想通り豊作になったが、人々は彼の言い値でしか機械を借りることができず、大もうけをしたという。こうして彼はやろうと思えば金持ちになれるのだが関心がないことを示したという。ちなみにここで彼が「使う権利」を買ったというのは、20世紀末になってから商取引の世界で注目されてきた「デリバティブ」という手法を、2000年以上前に先取りしたものとして有名である。

イオニア学派以外では、**ピタゴラス**学派がある。これはピタゴラスを開祖とし、数の神秘性を追い求めた学派である。たとえば現代人がラッキーセブンというが、7を幸運の数としたのは彼らである。しかし最も有名なのは彼らが（または開祖ピタゴラスが単独で）発見した**ピタゴラスの定理**（別名**三平方の定理**）であろう。つまり図のような直角三角形の三辺a,b,cでは、かならず $a^2 + b^2 = c^2$ が成り立つ。

彼らはエジプト文明の影響を強く受けており、後で述べるが、有名な哲学者プラトンにも影響を与えた。他にも**ヘラクレイトス**は、アルケーを火であると説いた。また彼はピタゴラス学派から調和の考えを受け継ぐとともに、すべてのものは変化していると考えた。彼の有名な言葉が「**万物は流転する**」である。

その後、アテネ市の発展につれて学問の中心もギリシア本土に移った。民主政が発達したアテネであったが、先述したように当時は行政・立法・司法が分離し



ていなかった。このため議会にとって、必須の技能が雄弁さ、つまり弁論術であった。日常の雑務は奴隷に任せ、高度な判断ができることを誇っていた彼らが、弁論術を誇ったのは当然だった。このためこの技術を教える人材が重宝された。そうした教師はソフィストとよばれた。彼らは弁論術を磨くため、効果的すなわち論理的な話の組み立て方を構築した。これが後に論理学となっていく。さらにこの論理学は、自然哲学と組み合わせあって、合理的な自然理解の方法を生んだのである。

ソフィスト一派に関しては、あまりに論理を（しばしば面白半分）に駆使しすぎたため、そして彼らが相手とする「客」のほとんどが議員などの富裕市民だったことから、やっかみ半分<sup>きべん</sup>に詭弁論者（へ理屈で人をやりこめる人）という見方をされた。確かにそういう面はあったが、彼らの多くはその技術を磨く中、物事をすべてにおいて相対的に見る見方を発見したのである。

しかしながらこうした相対論は、突き詰めていくと、多くのギリシア人が信じていた神の存在さえ否定することになる。そして実際にそんな見方が若者に広がったため、ソフィスト風の議論を身につけた若者が、既存の価値観や信仰を否定するようになって成年や老人と対立するようになっていった。つまり世代間の断絶の原因となったのである。怒った高齢世代は、当時のすべての問題を若者とソフィストのせいにした。それは部分的には間違いではないが、誤解の部分が多い。しかし現代でもニートやフリーターが世の中をおかしくすると考える高齢世代が多いので、昔話と片づけることは出来ないだろう。

実際プロタゴラスというソフィストは、市民に嫌われたために外国に逃げる途中、船が難破して死んでしまった。彼は神を知ることとは不可能と論じたため、「人間は万物の尺度である」という有名な言葉を残した。この言葉は、人間はすべての物事を自分の理解できる範囲でしか理解できず、その理解を元にして世界像を描こうとする性質を多少皮肉った表現である。

ではここで、この時代の論理の遊びを少し見ていこう。まずはゼノンのパラドックスとよばれるシリーズものの一つ、「アキレスと亀」。

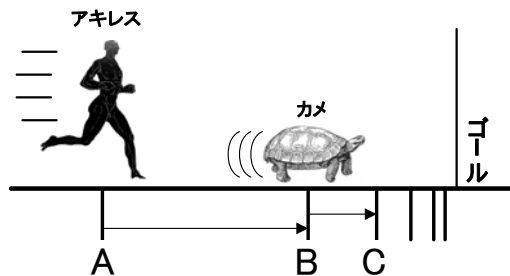
あるとき伝説的な俊足の持ち主アキレスと亀が100m競走をすることとなった。しかしアキレスの方が足が速いのは明らかなので亀がハンデをもらって、いくらか進んだ地点（地点Aとする）からスタートすることとなった。

スタート後、アキレスが地点Aに達したときには亀はアキレスがそこに達するまでの時間分先に進んでいる（地点B）。アキレスが今度は地点Bに達したときには亀はまたその時間分先へ進む

（地点C）。同様にアキレスが地点Cのときには亀はさらにその先になることになる。これがいつまでも続き、結果としていつまでたってもアキレスは亀に追いつけないことになる。

しかし常識的にはこれは間違いだと誰でも分かる。足の速い者が遅い者に追いつけないはずがないからだ。しかし上記の論理を追っていても、なかなかうまい解決策が見あたらない。こうした論題は実は論理を学ぶための例題なのである。こうした例題を解くために問答をくり返し、知識を確実にする方法を編み出したのが、上述の哲学者ゼノンなのである。ただしこのゼノンは後述するストア派のゼノンとは別人である。

現代人なら「数学」という便利な方法があるので解決できる。たとえば、アキレスが100mを10秒（10m/秒）で走るとし、亀は100mを100秒（1m/秒）で走るとする（世界一足の速い亀だ）。アキレスが100m地点、亀が50m地点から出発するとすると、アキレスが亀の地点まで行くのは $50\text{m}/(10\text{m}/\text{秒}) = 5$ 秒かかる。その間に亀は $5\text{秒} \times 1\text{m}/\text{秒} = 5\text{m}$ 進む。次にアキレスが亀の位置に行くのには $5\text{m}/10 = 0.5$ 秒、その間に亀は $0.5 \times 1 = 0.5\text{m}$ 進む。次にアキレスが亀の位置に行くのには $0.5\text{m}/10 = 0.05$ 秒・・・ということになり、このあと永遠に5が続くのだが、決して6秒を超えることはない。つまり6秒以内にアキレスは亀に追いつき、追い越してしまうのである。つまりこのパラドックスは、「永遠に5が続く」というのを「永遠に追い越せない」と結論づけた



方法:ゼノンの編み出した方法を「弁証法」という。もともとこれは、裁判や討論で対立する考えを妥協に導く方法論であったが、ゼノンによって、哲学的な議論の方法という意味がつけ加わった。さらにこれに「世界の変化を表現する方法」という意味が、19世紀ドイツの思想家ヘーゲルによってつけ加えられる。

ところが間違いだったのである。このように現代の「数学」という解決法を知らない古代人にとっては、解決することが非常に難しい問題だったのである。

ではついでにもう一つおもしろい論題を見てみよう。これは古代ギリシアとは何の関係もない、野崎昭弘氏が『詭弁論理学』で紹介されていた問題である。

最大の自然数を $M$ とする。 $M$ が最大の数であるなら、 $M$ より大きな数はないから、

$M \geq M^2$  となる…①

ところが自然数は一般的に  $M \leq M^2$  である…②

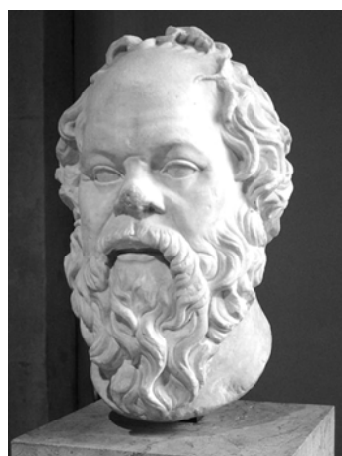
①、②から両方にあてはまるのは  $M = M^2$  …③

③で、 $M$ は自然数だから、両辺を $M$ で割ると  $M = 1$ 。従って最大の数は1である。

さてどうだろうか。これは答えは教えないので自分で考えてみよう。ヒントは上のアキレウスと亀と同じように考えること。ただし小数や無限の和は必要無い。あることに気がつけば分かる。「常識」こそがこの問題の解決手段である。

さて本題に戻ろう。この時代、ソフィストとは別の理由で嫌われていた人物がいた。名をソクラテスという。彼は若い頃はペロポネソス戦争に従軍したこともあり、母は助産婦（古い言い方は産婆<sup>さんば</sup>）であった。若い頃から自然哲学を熱心に学んだこともあって、思想家として有名になっていた。

あるとき彼の弟子の一人が、デルフィの神託で「ソクラテスより賢い人はいるか」と聞いた。すると巫女は「ソクラテスより賢いものはいない」という答えを返した。これを聞いたソクラテスは、そんなはずがないと思い、当時賢者として知られていた人物たちに片っ端から質問した。その結果わかったことは、彼らはみな常識に固執するあまり、自分が無知なのに気がついていなかったところである。そしてどうやら自分だけが、自分が無知であることを知っているということだった。彼はこのことを「無知の知」と表現し、まず人が賢くなろうと思ったら気がつくべきこととした。そしてこの時の有意義な対話を、人間がより早く真実に達するためには必要な手法と考えたのである。彼はこの方法に対話法（弁証法という訳語もある）、または彼の母の職業にちなんで産婆術と呼んだ。ソクラテスの手法は斬新で、多くの優秀な弟子を輩出した。その中には、ペロポネソス戦争のところで触れたアルキビアデスのように、政界で活躍する者も多かった。



ソクラテス

しかしソクラテスと対話したソフィスト達は、自分が無知なのに気がついて、それを自分を向上させるチャンスと考えず、ただ彼に恥をかかされたとしか思わなかった。しかしアテネ市民は、普段は偉ぶっているソフィストがボコボコに凹まされるのを見て喜んだ。彼がこうしたことを行っていた時代はペロポネソス戦争後の内乱直後であり、市民から為政者の間にまどうぶんがたまっていた時期であった。ソクラテスを嫌っていたのは、当然ソフィスト側の人間が多かった。

そんな彼が裁判に訴えられる事は、避けられなかった。訴状には「アテナイの国家が信じる神々とは異なる神々を信じ、若者を墮落させた」とあったが、あまり明確な罪状ではない。訴えたのは三人の人物であったが、前面に立った二人は無名の市民だった。しかし、付け足しのように添えられた最後の人物の名前を聞いただけで、当時の人々にはその事情が理解できたのである。

ペロポネソス戦争後の内乱でアテネ市が二分されたことは前に書いたが、ソクラテスを訴えた人物は、彼の弟子達の勢力に反対する党派の政治家だった。彼らの党派は、アテネの惨めな状況をソクラテスのせいだと見なし、彼がソフィストを攻撃して市民から喝采を浴びているのを苦々しく思っていたのである。

しかし裁判においてソクラテスは、なぜか弁明したり自説を曲げることなど一切せず、追放刑という判決さえ拒否してしまう。当時これは死刑を意味していた。そして弟子達が驚いたことに、ソクラテスはそれを受け入れたのである。弟子たちは必死になって師を逃がそうとした。幸い、判決はアテネは祭礼期間の直前

に出され、死刑執行は祭礼後に行われることになった。この間、やろうと思えば牢屋の番人に金を握らせるだけで逃亡することは可能だったが、彼はそれさえも拒否した。そして最期の時まで「悪法も法なり」として自説を守り、死を受け入れたのである。師の一連の言動は、弟子達にとって不可解そのものだった。

ソクラテスは著書を一切残さなかったが、弟子たちが記録を残している。彼の高弟として有名なのがプラトンである。プラトンは叔父や兄もソクラテスの弟子であり、師とは40才ほど年齢が離れていた。

やがて彼はソクラテスの後を継ぎ、**アカデメイア**とよばれる学校を作って師の教えを発展させた。ここでは師の教えにしたがって対話が重視され、学生は先生に対しても、自由にものが言えた。プラトンの著作はほとんどがここで書かれている。彼の代表作で、師ソクラテスの教えを最もよく伝えているのが『ソクラテスの思い出』である。プラトンは他にも『国家論』などの著書がある。彼の作品の特徴は、その著書のほとんどで、語り部としてソクラテスが登場していることである。

彼の思想の特徴は、自然哲学者と違って、世界のあり方を説明するのに「イデア」という世界を想定したことである。イデアとは理想界と訳される。それは人間には感じることはできず、理性によってのみ把握できる。たとえばイデアの世界にリングがあれば、現実世界にもリングがあるが、現実世界のものはイデア世界のものの不完全なコピーなので、色が異なっていたり味が悪かったりする。またイデアの世界の人間は完全だが、現実世界の人間は不完全である。さらにイデアの世界には完全な善があるが、現実世界はそうではない。したがってソクラテスが死ななくて良いような社会を築くには、人間は理性を働かせて理想的な政治の形、すなわち善のイデアをとらえなくてはならないことになる。

プラトンが理想的な政治体制としたのが、哲学を修めた政治家（哲人）による統治体制（哲人政治）であり、それは一種の独裁制であった。これは彼が師ソクラテスを殺した民主政治（アテネの衆愚政治時代）に対して抱いた不信感が反映したものと思われる。

このイデア論には、幾何学の射影という概念に似た点がある。

プラトン以外にも、クセノフォンという弟子が『ソクラテスの思い出』を残している。クセノフォンはけっきょく、哲学者にはならず、作家として有名になった。彼は重装歩兵として従軍した経験があり、その頃のアケメネス朝の内情を描いた『アナバシス（大陸行）』は当時のペルシアの様子を知ることができる重要な作品である。

プラトンが育てた弟子たちも、世界に大きな影響を与えた。その中で最大の存在は何といても**アリストテレス**である。彼は、歴史上の影響において最大級の思想家である。

アリストテレスはギリシアにおいては辺境の野蛮な国とされていたマケドニアの出身であった。彼の父は王家御用達の医者であったが、彼がまだ幼い頃に病死してしまった。しかし伯父が彼を引き取って愛情込めて育ててくれ、伯父の勧めで17才でプラトンのアカデメイアに入学した。

聡明な彼はすぐに頭角を現し、プラトンが亡くなった頃には学園を代表する教師であった。師が亡くなった後、彼自身は自分こそ師の業績を受け継いでギリシア最高の学校である**アカデメイア**学院の学長になれると思ったが、結局それは他の人になってしまった。

また当時、アテネでは指導者デモステネスによる反マケドニア運動が起きており、彼は何度も身の危険を感じた。このため、アリストテレスはアテネを脱出し、故郷マケドニアに帰国したのである。それはほとんど亡命であった。

その後有名な哲学者がいることを知った国王**フィリッポス2世**に招かれ、王子**アレクサンドロス**（後の大王）の家庭教師となったのである。王子は優秀であったようで、アリストテレスは彼に、自然界や世界に対する興味と、学問に対する尊敬の姿勢を12年間にわたって教えたという。

アレクサンドロスの即位後、後は反マケドニア運動のほとぼりが冷めたこともあり、再びアテネに戻って新たな学校**リュケイオン**を創設する。ここで彼は、自らの研究を行いながら弟子たちの育成に励んだ。ここでは学園の建物の回廊を歩きながら対話する（<sup>しょうよう</sup>逍遙する）というスタイルの授業が行われたことから、彼の一派を逍遙学派ともいう。アカデメイアは健在だったが、すでにプラトンの頃のものとは大きくずれてきていた。



アリストテレスが関心を寄せたものは非常に多くの分野にわたり、ソクラテス以来の哲学論理学は当然のこと、文学、天文学、気象学、動物学、植物学、そして倫理学、政治学といった多種多様な分野に及んだ。その影響力は多大で、近代までの諸学問はすべて彼の影響下にあったといって良いだろう。彼は「万学の祖」という評価を得ている。

その例を少し説明しよう。まず論理学。**三段論法**は彼の発明である。その一例をアリストテレスから引く  
大前提：すべての人間（B）は死すべきもの（C）である。

小前提：ソクラテス（A）は人間（B）である。

結 論：ゆえにソクラテス（A）は死すべきもの（C）である。

となる。B=CでありA=BならA=Cであるということで、これは数学でも基本となっている。ただし、アリストテレスはこんな簡単な事を教えたわけでは無い。次の例を見てみよう。

大前提：すべての犬（B）は翼を持つ（C）。

小前提：すべての鳥（A）は犬（B）である。

結 論：ゆえに鳥（A）は翼を持つ（C）。

どうだろうか。結論においては間違いは無い。しかし、前提はどちらも誤っている。では次はどうか。

大前提：α大学は（B）は就職できる可能性が高い（C）。

小前提：私（A）はα大学に入学する（B）。

結 論：ゆえに私（A）は就職できる（C）。

これは、前提はどれも正しいのに、結論が誤っている例である。ではこれは、どこがおかしいのだろうか。

アリストテレスは、このような論法の形式をすべて挙げ、そのうちどれが、なぜ誤りなのか、どうすれば誤りを防げるのかということ进行分析したのである。ちなみに、三段論法で重要なことは①（大・小の）前提が正しいこと、②論理に飛躍が無いことの二点である。最後の例は典型的な飛躍がある。そしてしばしば人間は、そうした飛躍した論理で自分の行動を決めてしまうのである。

他にもアリストテレスは、師プラトンがイデアという理想世界の存在を仮定したのに対し、これを否定した。彼はすべての事物には、その存在の材質部分である質料と、その存在を成り立たせている要素である形相からなっているとした。これは人間でいえば肉体と精神に相当する。人が成長するにつれて自分を変えていくように、事物の形相にはそれ自身が様々なものになる可能性を秘めている。例えば木材は、机になる可能性も、柱になる可能性も秘めている。そして全ての事物は何かの可能性を持ち、事物の変化はそのもの自体の中に原因がある。そこにはイデアのような異世界を仮定する必要は無いのである。これがプラトン説が理想主義とよばれるのに対し、彼の説が現実主義とよばれる理由であった。

また彼はこうした変化の原因として、四つの原因（形相因・質料因・動力因・目的因）を挙げている。例えば建築物としての家は、形相因は「家というイメージ」であり、質料因は木材や壁土、動力因は大工、目的因は「住むということ」である。もしすべての事物からこうした要素を取り去ったとしたら、そこに残るのは究極の変化の原因である。彼はこれを「不動の第一動者」とよび、後世の人々はそれを神と見なした。こうした考えは、後のローマ帝国時代に広まるキリスト教思想と相性が良かったため、中世後期にキリスト教神学が生まれると、その柱となるのである。

彼はさらにすべての事物を成り立たせる要素を火・空気・水・土の四元素とした。これだけならすでに他の自然哲学者がやっていることと同じだが、彼はそれに加えて第5の元素アイテル（エーテル）を想定した。彼は宇宙の中心に地球があるとし、惑星や星はすべて地球の周りを回っているとした。さらに惑星はこのエーテルの上に乗って動いているとした。そしてこうした動きのさらに外側には惑星の運動の原因となっている「第一動者」の存在があるとした。この第一動者とは、アリストテレスははっきりとどんなものか語らなかったが、中世になるとこれは神のことだと思われた。ギリシアの最高の知識によって神が論理的にも発見されたのだとされたのである。かれのこうした「事物の存在理由」に対する研究を形而上学という。

このように多くの分野について彼の言及が及んだことから、彼の著作集は知に関する一種の百科事典のように扱われた。その影響は大きく、この後千数百年にわたって西はイベリア半島から東はインドまでの、地球の半分の世界の知性に影響を与え続けた。ただしこれは彼の誤り、というより彼が属していた時代の限界

から生じた誤った理解を定着させる結果となった。例えば彼は天動説（地中が世界の中心で天が地球の周りを動く）を信じていた。これは1800年後にコペルニクスやガリレオなどによって否定されるまで真理とされたが、16世紀のジョルダノ＝ブルーノのような犠牲者を生んだ。また彼の四元素論は原子論が公認されるのを遅らせ、そして「脳は血液を冷すための器官」という説は脳が知的活動の中心器官という説が確立されるまで、科学の世界で強い影響を与え続けてしまった。

これだけのことをなしとげたにもかかわらず、彼がマケドニア人であるということがアテネでの冷たい扱いを生んでいた。フィリッポス2世がギリシア諸ポリスの自治を奪い、アレクサンドロス大王がテーベを破壊して以来マケドニア人に対する反感がギリシアには満ちていた。そうした心理は大王が前320年に亡くなると一気に爆発し、アテネ市では激しいマケドニア人に対する迫害が行われた。彼は急いでアテネを逃げ出して亡命せざるを得なかった。師の師であるソクラテスは、アテネを愛していたが故にアテネ市の間違っただけの判断にあえて従って死を選んだが、アリストテレスはそうしなかった。彼もすでにアテネに30年余り住んでおりアテネを愛していたが、逃げ出した。彼はのちに、私はアテネを愛している。愛しているが故に、アテネに二度と同じ過ちをくり返させたくなかったと述懐している。翌年アリストテレスは亡命先で病気に倒れ、そのまま亡くなった。

## ■ギリシアの文芸

ギリシア時代の文芸の中心は何といっても詩である。中でも最も後世に影響を与えたのはホメーロスだろう。彼の二大作品『イーリアス』と『オデュッセイア』はいずれもトロヤ戦争を舞台にしている叙事詩で、シュリーマンの発掘に影響を与えたことは先述したとおりである。ただしこれらはいずれも口承文学とよばれる口伝で歌われた歌を整理して文章にしたもので、しかも現在ではイーリアスとオデュッセイアが違う人物によってまとめられたのではないかとされている。さらには果してホメーロスが実在したのかどうかまで疑問が出てきている。ともあれこの「ホメーロス」の存在は西洋文学の中においてはあまりにも存在感が大きい。ちなみに叙事詩とは、ある事件を詩の形式で歌い上げたものである。これに対して人間の感情を歌い上げたものが叙情詩である。

叙事詩においては他にヘシオドスの存在も大きい。彼の作品（これも疑問視されているが）『神統記』はギリシア神話の世界を体系的に描いた作品として、現在でもファンが多い。『労働と日々』は古代ギリシアの農民の感情や慣習を描いた作品として時代を研究する上でなくてはならない作品である。

叙情詩においてはサッフォーが最も有名だろう。彼女はギリシアでは珍しい女性の文学者である。情熱的な恋愛を歌った詩は熱烈なファンを古代から持っていた。プラトンなども彼女の作品を非常に評価しており「十番目のムーサ」（ムーサは9人の芸術の女神）とよんでいる。ただし彼女の作品は、あまりに愛の色が濃いため、中世キリスト教会によってふしだらな詩人として組織的に抹殺されてしまったためほとんど残っていない。たまたまエジプトのミイラを包んでいた羊皮紙の裏に彼女の詩が書かれたものがあったため、われわれが現在目にすることができるのである。ではその作品を紹介しよう。

これは彼女がいたレスボス島で彼女が作っていた詩の集団の弟子ゴングラに捧げた詩

わたしの、いとしいゴングラお願いよ  
とびきり白いチュニカをまとうてわたしの前にきて  
あなたはいつも美しい衣につつまれてほしい  
そうよ 見事に装ったお前を目にするひとが  
震えるほど驚くのを見てわたしは悦ぶの  
なぜって、お前のうつくしさは  
美の女神さえ咎めるほどだから  
わたしが乞い願うことは  
あなたの美しさが失われることなどないこと  
そしていつまでもあなたがわたしのもとへ帰ってくる  
あなたはいつまでも逢っていたい人だから



サッフォー(S.ソロモン画)

サッフォーの詩はこのように同性に対しても（もちろん異性に対しても）自分の感情を隠さず表現する傾向がある。これはどうもレスボス島の社会の雰囲気がそうだったことの影響があるらしい。しかしこうした表現は、男性の同性愛が公認されていたギリシア社会では女性の同性愛ととらえられることになり、彼女の作品が中世キリスト教世界で弾圧され、抹殺される原因となったのである。

政治の話のところでも触れたが、民主政期になって突然はやり出したのが演劇である。もとは祭礼のときに行われた民衆劇が、ペイシストラトス時代に**三大悲劇作家アイスキュロス**（作品『アガメムノン』）**ソフォクレス**（『オイディプス王』）**エウリピデス**（『メディア』）が現われて一気に人気を博した。さらにアテネの繁栄期に現われたのが喜劇作家**アリストファネス**（**三大喜劇作品**『雲』『女の平和』『女の議会』）である。



壺絵:ニケ(勝利の女神)

## ■ギリシアの歴史文学

ギリシア文学がホメロスのトロヤ戦争から始まったことから、戦争の記述はどうしてもギリシア人の関心を生んでしまうようだ。ペルシア戦争が始まったとき、この戦争はギリシアの将来に大きな影響を与えるに違いないと考えた人物がいた。それが**ヘロドトス**である。かれはできる限りこの戦争の背景を、事実はもちろんのこと、噂レベルの話まで総動員して全体像を描こうとし、戦争終了後オリエント各地を回って情報を収集して『**歴史**』全9巻を書き上げた。敵国であるアケメネス朝の建国から最盛期まで、そして戦争の発端から集結までを、巧みなストーリー展開で読む者を飽きさせずに描ききったのである。ただし分かりやすさを優先し噂話が混入されているため、現在では事実ではないと思われることまで混入していることは多少マイナス点だが、それさえも当時の考えを知る上では重要である。エジプト文明についてヘロドトスが「**エジプトはナイルの<sup>たまもの</sup>賜物**」と表現したことはあまりにも有名なが、実はこれはヘシオドスが原典であることは知られていない。

このヘロドトスの『歴史』と常に比較されるのが、ペロポネソス戦争を描いた**トゥキディデス**の『歴史』（ややこしいので『戦史』と表現されることが多い）である。ヘロドトスが読み物的な扱いで書き上げたのにたいして、トゥキディデスは実証的な態度でこの書を書いた。ただしなぜか途中で執筆が中断されたため、先述したクセノフォンが引き継いで『ギリシア史』として完成させている。

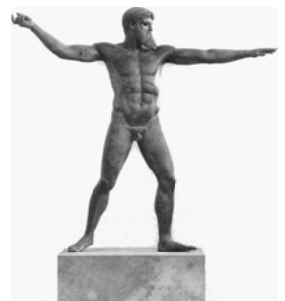
## ■ギリシアの絵画・彫刻・建築

古代ギリシアで発達し、世界に大きな影響を与えたものの一つがこの彫刻・建築である。ギリシアでは古くから人間をその姿のまま絵に描いたり彫刻で表わしたりすることがさかんだった。ただし当時は紙がなかった時代であるので絵を描くところは壺・陶器の表面。あくまでも商品のラベル代わりのものだった。壺絵は数多く残っており、当時の生活の様子などがうかがい知れるものとなっている。

ギリシアの彫刻は、神殿に捧げるためのもので、日本では絵馬にあたるものだった。その特徴は、例えば古いものでは表現はオリエントのものの模倣が多いが、**アルカイックスマイル**とよばれる微笑みの表現があるのが特徴である。また最大の特徴は、神を人間と同じような姿で表わしたことである。これはオリエントではそう珍しくはないのだが、アレクサンドロス大王が全オリエントを支配し、各地にギリシア文化を広めたことでこうした表現方法が伝わっていった。それが中央アジアからインド、中国に伝わる過程で各地



アルカイックスマイル



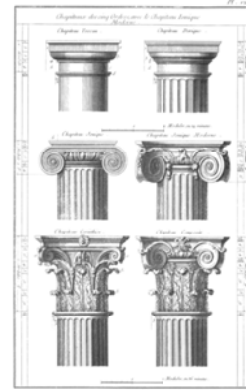
ポセイドン神像

の神像表現に影響を与えていったのである。このあたりは次のヘレニズム文化のところで詳しく書くことにする。

建築では、何といっても神殿建築が代表である。特に有名なのはやはり世界遺産にも指定されているアテネの**パルテノン神殿**だろう。**ドーリア式**の円柱で支えられたその姿は、いまでは屋根が焼け落ちているが、それでもかつての健在時の姿を彷彿とさせられる豪壮さに満ちている。かつては神殿奥にアテネ市の守護神アテナ女神像があったらしい。ドーリア式で用いられている円柱をふくらませる手法はエンタシスというが、これは屋根に大きな荷重がかかる巨大建築には無くてはならない手法として、ギリシア・ヘレニズム文化の広まりとともに世界中で用いられるようになった。日本の東大寺大仏殿などにも用いられている様式である。

ドーリア式が重厚な列柱と比較的簡素な装飾がされているのにたいして、これを少し細くし装飾を多少加えた形が**イオニア式**である。この二つの様式はドーリア式がペロポネソス半島からイタリア半島南部まで、そしてイオニア式が名前の通りイオニア諸国（アナトリア半島沿岸）で広まっていた。これら2つの様式から少し遅れて生まれたのが**コリント式**で、名前の通りコリント市で生まれた。ギリシアではほんの少ししか用いられなかった様式だが、ローマ時代になるとさかんになり、ほとんどコリント式一色になってしまう。

もう一つ有名な建築が劇場である。次の写真はアテネのエピダウロス劇場の遺跡である。これはもともと合唱や合奏を聴くために丘の斜面などを削って作られたもので、後に演劇がさかんになるとそれも上演されるようになる。



建築様式 上からドーリア式、イオニア式、コリント式



音響効果が最大になるように設計されており、奏者や話者の小さな音声でさえ劇場の端までよく聞こえるようになっている。ギリシアではいまでもあちこちの古代の劇場が現役で使用されているのである。

## ■ヘレニズム文化

アレクサンドロス大王の東方遠征では、多くのギリシア人がともに遠征に加わっていた。大王は戦略的な意味からもあちこちにくさびのようにギリシア人の植民都市を造り、それが各地域の根拠地となって帝国を維持する機関となっていった。こうした植民都市を中心にオリエント中に広まったのがギリシア人（ギリシア人自身はヘレネスとよんだ）の名をとって**ヘレニズム**とよばれる文化である。

## ■ヘレニズム時代の宗教と信仰

ヘレニズムがオリエント世界にもたらしたものの中でもっとも大きいものが、信仰に与えた影響である。中央アジアからインドにかけての信仰では、神は特定の姿を示さず、人間に対しては光や音、天変地異の形でその意志を示すと考えられていた。地域は違うが、日本語の「雷」などはそれをよく表している。雷は「神・鳴り」であり、神が神意を示すために鳴るのだと信じられていた。ただしそれが何を示すのかは司祭が様々な手法で探らねばならないのだが。

インドでは最高神は日輪で代表され、姿を人間のように表現することはなかった。それがギリシア人の手法が伝わると、この分かりやすさが取り入れられて、この地域でも神の擬人化つまり神の像を、人間に似た

姿で表す手法が広まっていく。やがて現アフガニスタンのガンダーラ地方では、伝来したばかりの仏教でも同様な変化が起こって、それまで車や手形、足形で表していた仏陀の姿を人間に似せて表す、つまり仏像が作られるようになったのである。

この分かりやすさはオリエント一帯に広まり、これを表現するのにギリシア人が持ち込んだ文化は都合がよかった。すでにギリシア語は古代ギリシア時代に抽象的概念から世界を表現する言葉をじゅうぶんに持っており、これにたいしてオリエントの諸言語は持っていなかったのである。

こうしてギリシアの信仰やオリエント各地の信仰は、互いに影響を与えながら混じり合っていた。混じり合う中で、新しい要素が生まれることもあれば、古い信仰が無くなることもあった。ヘレニズム時代に新しい宗教として、ミトラ教やマニ教が生まれ、ゾロアスター教やエジプトの宗教も変質していった。

## ■ヘレニズム時代の哲学

ギリシア文化の特徴の一つであった哲学は、ヘレニズム時代にも受け継がれた。この時代の大きな論点は、ギリシア時代にプラトンやアリストテレスが展開した論点が通用しなくなったことであった。彼らはいずれもポリス社会を前提として議論をしていたが、ヘレニズム時代のギリシア人は、支配者ではあるが広いオリエント世界の少数派として生きて行かざるを得ず、孤独感に苦しんでいた。こうした社会を背景に哲学を展開したのがエピクロス派とストア派である。彼らの主たるテーマは「いかに生きるか」だった。

まずエピクロス派（開祖エピクロス）は、人の欲求を、自然で必要な欲求（たとえば友情、健康、食事を求める欲求）、自然だが不必要な欲求（豪華な食事や贅沢な生活）、自然でもなく必要でもない欲求（名声や権力）の三つに分類し、このうち自然で必要な欲求だけを追求し、苦痛や後悔や恐怖を避ける生活を送ること（**快楽主義**）、そして結果として生まれる「平静心（**アタラクシア**）」を追求することを良しとした。こうした理想を実現するためエピクロスは「隠れて生きよ」といい、俗世を離れた共同生活の場を作った。しかしこれは、一般社会との関わりを忌避することになり、教団が衰退する結果となった。

もう一つのストア派（開祖ゼノン）は、いっさいの欲望を捨て去った生活（**禁欲主義**）を実践することを良しとした。欲望にまみれた墮落した生活は、魂までも墮落させると考えたからであり、いかにして墮落しないかが求められた。彼らは喜怒哀楽といった、あらゆる感情から解放された状態（アパテイア）を、最善の状態、理想の状態として追い求めた。当然、死に際しての恐怖や不安さえも克服の対象と考えられた。こうしたことから、人は運命を受け入れる「覚悟」が必要とされ、人の自由意志は尊重するが、命そのものには執着しない傾向を示した。彼らの生き方の理想として挙げられるのがソクラテスの最期である。ストア派はローマ帝国時代になると支持者を増やし、帝国の支配層はストア派一色に染まっていく。さらにストア派の基本理念はキリスト教とも共通するものがあったため、後にローマ帝国でキリスト教が普及するきっかけにもなっていった。

## ■ヘレニズム時代の自然科学

自然科学の分野も、ギリシア以来の活況を受け継いでおり、この時代プトレマイオス朝によって保護されたアレクサンドリアでは、現在の大学に当たるムセイオンという学院で、多くの学者が王家の保護のもとに活動していた。

まずエウクレイデス（英語ではユークリッド）は、それまでのオリエントやギリシアの数学を集大成したものを『幾何学原本』として著した。これは古代から中世を経て、遠くヨーロッパから中国まで長く数学の教科書として使われ続けた。

アリストアルコスは天文学者としての観測から、地球が球体であり、公転と自転をしていると主張した。それはこの後2000年近く後のルネサンスの時代を先取りしている。

エラトステネスも天文学者であり、彼は地球が球形なら、その大きさを測れるだろうとして、エジプトの離れた二つの町の距離と太陽の角度の差から、実際に地球の大きさを計算してみた。その結果、地球の外周は約4万6千キロであり、現代の4万120キロと比べても、そう大差がない。さらに彼はある数が素数かどうか判定する方法として、「エラトステネスの篩（ふるい）」とよばれる簡便な方法を発見している。

この時代最大の科学者は、**アルキメデス**であろう。彼はギリシア人の植民地から発展したシチリア島に住んでおり、島の最大の都市シラクサ市の僭主ヒュロンに懇願されて市の顧問となった。シラクサとローマが戦争になったとき（第二次ポエニ戦争）には、劣勢でありながらアルキメデスが発明した数々の新兵器によって無敵のローマ軍が苦しめられたという。伝説ではこの時凹面鏡が作られて太陽光を集めたビームがローマの軍船を数多く焼いたという。こうしたことからシラクサが敗北した際、その才能を惜しんだローマの将軍によって「アルキメデスだけは絶対に殺すな」という厳命が下されたという。しかしまたま落城の際に彼は数学の難問を地面に書いて解いていて、それを踏みつけたローマ兵を怒鳴りつけたため殺されたという。

アルキメデスについてはもう一つ有名な話が残っていて、ヒュロンが金細工師に金を渡して純金の冠を作らせたが、その際この細工師は混ぜものをして金を減らして懐に入れたという話が伝わってきた。そこで困ったヒュロンはアルキメデスに、一つも傷をつけずに冠が純金かどうかを判定してくれと頼まれたのである。さすがのアルキメデスもこれには困ったが、悩みに悩んだ後風呂に入ったとき、風呂桶から湯がザーっと流れ出したときに解決法を思いついたのである。喜んだ彼は、思わずギリシア語で「Eureka!（わかった）Eureka!」と叫びながら、素っ裸で家まで帰って計算したという。アルキメデスは金細工師に渡したのと同じ重量の金塊を用意し、金塊と冠のそれぞれを、ぎりぎりまで水を張った容器に入れた。冠を入れると、金塊を入れたときよりも多くの水があふれ、金細工師の不正が明らかになった。すべての物質は、重さ（質量）と体積が異なっているという**アルキメデスの原理**の発見である。

他にも円周率 $\pi$ を求めようとして、円に内接する多角形と外接する正多角形の長さから、正96角形までを計算して $223/71 < \pi < 22/7$ であることを示した。これは小数で表すと、 $3.14085\cdots < \pi < 3.14286\cdots$ となり、 $\pi = 3.141592653589793238462643383279\ 502884197169399375105820974944592307816406286208998628034825342117067982148086513282306647093844609550582231725359408128481117450284102701938521105559644622948954930381964428810975665933446128475648233786783165271201909145648566923460348610454326648213393607260249141273\ 72458700660631558817488152092096282925409171536436789259036001133053054882046652138414695194151160943305727036575959195309218611738193261179310511854807446237996274956735188$ に非常に近い数値である。

先にも述べたが、こうしたヘレニズム時代の自然科学は、インドに伝わって大きく発展する。さらにこれは、ビザンツ帝国やイスラーム、そしてヨーロッパ中世の大学や修道院で研究が進められた。これらはやがてイタリアルネサンス時代にヨーロッパ中に注目され、18世紀に科学が生まれるきっかけとなり、現代世界に非常に大きな影響を与えるのである。

## ■ヘレニズム時代の彫刻・建築

ギリシア彫刻はますます擬人化の傾向を強め、よりリアルに人体を描くようになり、彫刻には表情までリアルに描く手法が一般的になる。トロヤ戦争のところに載せてある「ラオコーン群像」はヘレニズム時代の傑作である。しかし何といてもこの時代を代表する傑作は『ミロのヴィーナス』像と『サモトラケのニケ』像だろう。

『ミロのヴィーナス』は1820年にメロス島（英語名ミロ島）で発見され、ルイ18世によってルーブル美術館に収蔵された。両腕がないにもかかわらずその躍動感や美しさは腕の欠落を補ってあまりあるほどであり、両腕がないことがさまざまな想像をかき立てられるとして、古代美術の最高傑作とされている。

『サモトラケのニケ』に至っては、両腕どころか頭部まで欠損しているが、翼の躍動感の表現がそれを補ってあまりあるほどである。これも『ミロのヴィーナス』と並ぶ古代芸術の最高傑作である。



ミロのヴィーナス



サモトラケのニケ